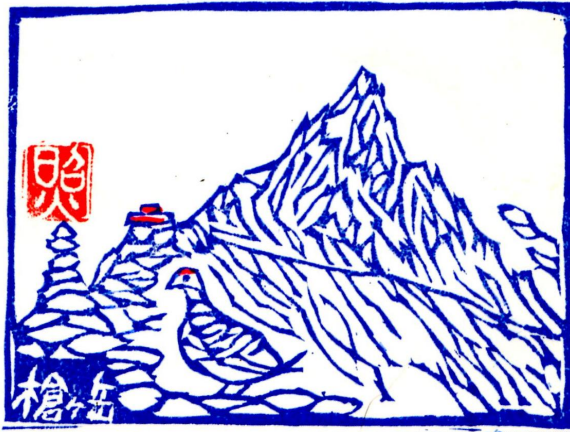
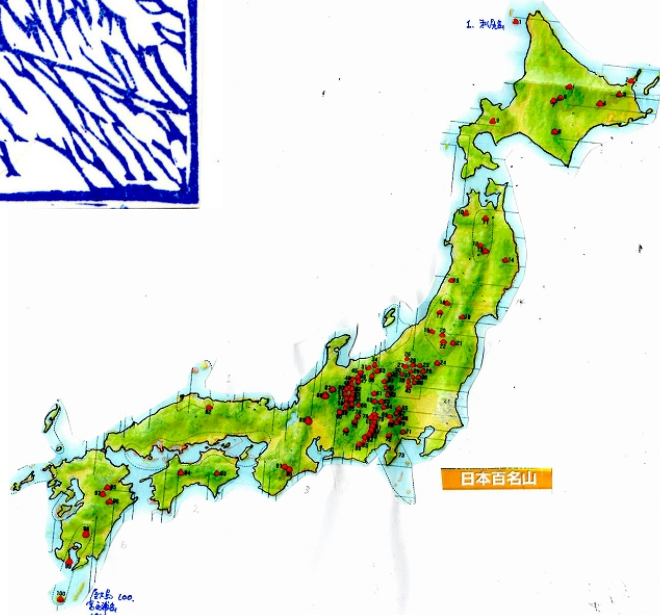


私の日本百名山 山歩き備忘録



北アルプス槍ヶ岳 (3180m)
2002 年 9 月 20 日



1座目の北海道の利尻山から 100 座目の屋久島宮之浦まで
100 山の分布。北アルプスから南アルプスに多く分布。
(1964 年四国剣山から 2013 年北海道斜里岳)

私の日本百名山 山歩き備忘録

村松 照男 2019 年 7 月

『礼文島から眺めた夕方の利尻岳の美しく烈しい姿を私は忘れることが出来ない。海一つ距てそれは立っていた』で始まる深田久弥の日本百名山は利尻岳、羅臼岳、斜里岳・・・北海道の 9 山から屋久島の宮之浦岳の 100 山はその多くが北アルプスから南アルプス関東甲信越に集中して選ばれていた。私の日本百名山山歩き雑記にはデジタル資料、アナログ的に整理した地図や写真などがクリフファイルで 30 c m 近くの厚さとなった。登った百の山々には百の記録がありそれぞれの山々に込められ 100 の想いが残っている。その多くに山々と一諸に登った山々の折々の随想、記録とともに私の百名山を振り返って北海道の素晴らしい山々とともに記憶と記録の整理としてまとめてみた。

●**1964 年から 1970 年**を振り返れば、大学の時の 1964 年の夏休みに一念発起、当時の国鉄の割安切符だった四国周遊券を使った 12 日間の旅で山麓の穴吹から剣山頂上直下の剣山測候所の宿直室泊めて貰いかずら橋で有名な吉野川の源流の祖谷に縦走した際に**剣山**に登り（7 月 30 日）これが百名山の一座目となった。長い休みはもっぱら山頭火のごとく全国を歩き廻り 1965 年、東北一周の旅で、寝袋をザックに入れて 2 週間かけて歩き回ったりした。当時、均一周遊券というありがたい切符があり急行乗り放題で、夜行列車で寝たり駅で寝たりした。花輪線の十和田南からどこまでバスで行ったか不明だが、雪で不通となった発荷峠を道路まで流れ落ちた雪崩の雪を超え 1 日かけて十和田湖にたどり着いた。下北半島の恐山をみて、作家の水上勉が『飢餓海峡』を書いた下北半島の先端の宿に安く泊まらせてもらい、三陸地方のリアス式海岸を徒歩とバスで 3 日間かけて久慈から宮古、釜石、陸前高田まで南下した。途中、バスの停留所の長椅子に寝袋で寝ていたら最終の運転手から二階の運転手用の畳部屋で泊まれと声がかかり好意に甘えて寝させてもらった（早朝一番のバスの運転手の宿泊だった）。翌朝、暖かい味噌汁を頂いたが望外のおいしさだった。当時はまだ人情厚い時代だった。その時「三陸田老」を訪れた時の随想が残っていた。・・・

★『三陸田老にて』

『田老』という名を聞けば津波が浮かぶ。三陸地方の一漁村、田老という町が有名となったのは昭和 35 年のチリ津波のときである。地球の裏側にあたるチリで有史以来最大級の M9.5 の大地震が発生、大津波が太平洋を越えて日本を襲ったのである。太平洋沿岸で最大 6 m を超す津波によって全国で死者 142 名という甚大な津波被害となった中で三陸の田老だけが全く犠牲者がなかったのである。この小さな町が日本でも有数の壁の様な津波防潮堤で守られていたからである。裏返していえば、それほど田老という町は過去に何度も大津波によって大きな被害を蒙っていた。

大学の春休みの三月下旬、蔵王、十和田湖、下北半島そして三陸海岸を久慈から宮古を目指してリアス式海岸を南下した。宮古は小学校のとき一年間住んだ町である。田老は宮古の北にある典型的なリアス式海岸の海岸線の奥深い港を中心にした漁村で湾口が東方向、太平洋に向って開いている津波に弱い溺れ谷の地形となっていた。この小さな町に似合わないとても大きな防潮堤が聳えていた。「万里の長城」と呼ばれた堤防に沿ってしばらく歩くと町はずれの崖に白いペンキで二本の線が描かれていた。明治二十九年十月、昭和八年十月と描かれていた。すぐに

三陸の大津波の高さとわかった。ビルの五階に相当するその高さは湾の奥では俎上もあいまって一体どのくらい津波となったのか想像がつかない。堤防脇の高さ3メートルの大きな石碑には防潮堤建立碑文が次のように刻まれていた。

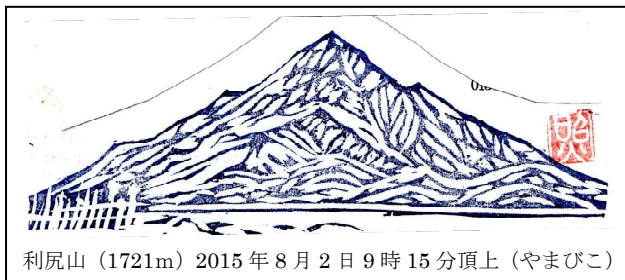
『慶長十六年十月二十八日、延実五年三月十二日、寛暦元年五月二日、寛政五年一月七日、安政三年七月二十三日、明治二十九年六月十五日、昭和八年三月三日ニシテ、就中被害最モ凄惨ヲキワメタルモノハ慶長明治昭和ノ三回トス。・・・』

たまたま知り合った古老の話は悲惨だった。静かに次のように語ってくれた。「昭和の大津波は三月三日の節句に來襲した。揺れはそれほどではなく不意に大津波に飲み込まれてしまった。一家全滅も数多く、私の家も家族五人が流され私だけが生き残った。ほれ、あの寺まで津波が来た。あの家だけが残った」』と指差した先は小高い丘の上の松に囲まれた寺であった。そこまで津波が来たという想像を絶する高さだった。古老に32年前の津波を思いださせてしまったと自責の念に駆られたとともに、打ちのめされても立ち直り自然の凶暴さに立ち向かう人たちの強靱さを巨大防潮堤に見た想いである。田老を後にして宮古に向った道々、高台には津波石碑が建てられて三陸の宿命をみるようだった。(1965.3)』

46年後の2011年3月11日日、安政、明治、昭和に次いで平成の大津波が襲来、巨大堤防を越えた激流で三陸沿岸の街々とともに田老の街を再び壊滅させてしまった。・・・・・・・・・・

慶長十六年十月二十八日、延実五年三月十二日、寛暦元年五月二日、寛政五年一月七日、安政三年七月二十三日、明治二十九年六月十五日、昭和八年三月三日ニシテ、就中被害最モ凄惨ヲキワメタルモノハ慶長明治昭和ノ三回トス。試ニ昭和八年ノ被害ノ概況ヲ拳ゲクレバ流失倒潰戸數五百五戸死者九百十一人。貨財ノ損害實ニ三百數十萬の巨額ニ達セリ而モ其ノ變災ニ於テ萬死ニ一生ヲ得タルノト雖モ全ク衣食住ノ途ヲ失ヒ其ノ慘狀言語ニ絶シタルモノト雖モ全ク衣食住ノ途ヲ失ヒテ慘狀言語ニ絶シタルモノアルキル此ノ報一タヒ天聰ニ達スルヤ天皇、皇后陛下ニオサラ天皇、皇后陛下ニオサラレテハ深軀五御軫念於ニサレ特ニ憂渥ナル御沙汰ヲ賜ヒ侍從ヲ遣フセ於ヲサレテ視シタ慰メ御内努ヲ聞キ給ヒテ救恤ノ資ヲ勸下賜アラセラレ・・・』

次いで1966年の山開き前の6月、同期の仲間3人と共に無謀にも標高800mの浅間神社から富士山頂(3776m)にある富士山測候所を目指したが標高3400mを越えたところで疲労と高山病のため撤退、翌年1967年夏、5合目から御来光を目指して登った富士山が2座目だった。



1968年2月の半ば過ぎ、卒論も書き終え思い立って大菩薩峠から大菩薩山(以下(3)と省略する.2057m))に登った。裂石温泉登山口から丸川峠に登り丸川小屋に泊まった。鹿の刺身を初めて食べた。南極行の前に利尻山(4)、1721mに登った。

『1970年、その南極行きは、南極海の氷海に入ったところでのっけから躓いた。猛烈なブリザートを避けて迷い込んだ氷山群の中で厚さ10mを越す大氷原に閉じ込められ、スクリューを破損した1万トン級の砕氷艦ふじが見渡る限りの白い氷原のなかで全く身動きできなくなった。幾度もブリザート見舞われ暴風で動く氷盤に押されて船体を傾き恐怖を感じ船底の水を動かシバランスを戻った時はほっとした。船底が丸く設計されており氷盤に押されても上に浮かび船体は押

しつぶされない設計となっているがやはり不安はつづいた。この厳しい状況を招いた艦長の判断が素人目でもわかるほど適切でなく指揮官がどうあるべきかを極地という極限況でどう対処すかもあいもつてずいぶん勉強となった。閉じ込められ40日、何もやることもなく氷上サッカーに興じアルコールを消費し「本国から救援艦の派遣、船体を放棄して越冬中止」という最悪プランという瀬戸際まで追い込まれた。この絶望的な窮地を救ってくれたがそよそよと吹く南風、南極大陸から海に向かって吹いた風だった。わずか半日足らずの幸運な風向きが十重二十重に重なった大氷盤を緩め、真っ白な氷野にか細く伸びた水路を作ってくれた。閉じ込められたブリザードも開放してくれたのも何れも南極の自然そのものだった。船の幅より細い水路を全速で押し開き脱出、昭和基地近海にひと月半遅れで着いた。睡眠4時間、(白夜の世界で40日間日が沈まないので働き放題・・・)の連続で物資輸送に明け暮れやっと越冬成立にこげつけた。それから1年を超す昭和基地での越冬は素晴らしく、漆黒の空に南十字星が輝き溢れんばかりの星を背景にオーロラが激しい動きで舞い狂っていた。-40℃を超す厳しい寒さ、2m先が見えないブリザード、白い大陸を染める夜明けの茜色と穏やかな夕暮れに南極の自然の厳しさ美しさにどっぷりと浸かることができた。暗夜が明けて水平線を転がる太陽が顔を出し、やがて越冬の終わりの頃になると、太陽が沈まない白夜の季節となりペンギンの来訪というおまけがつく。極地での1年を超える体験は人生観を変えるほど大きかった。その頃の越冬仲間は、京大の山岳部の面々をはじめ山狂いの連中が多く、雰囲気も暖かで40年を過ぎた現在でも付き合いが続いている』・・・。



転がる太陽（冬至を中心に40日間の暗夜の後、太陽が北の空を転がるように動き沈んだ）南極昭和基地

1970年の11月～72年の3月まで、オーロラが舞う南極昭和基地で越冬し厳しく美しい自然の中で1年半過ごしたが後の百名山を含む山歩きの伏線となったのだろう。

●その後1971年から94年までは、南極から札幌に戻って気象台の仕事、とりわけ大雪の予測の研究調査やら組合運動等、子育てなどで二足のワラジ三足のワラジをはき、30代に入って気象衛星ひまわり1号の打ち上げ業務で東京に転勤、気象研究所では台風の研究で当時研究学園都市と称した茨城県つくば市で5年間、40代は東京に戻って天気予報の仕事、半ば過ぎに3回目の札幌への転勤で一家揃って引っ越してきた。山歩き、山登りの転機となったのは40代後半、千葉県柏市にある母校の気象大学で教鞭をとるべく単身赴任の転勤となった時である。転勤から2年間は大学の学生の指導と全国の予報官への研修などで多忙を極め、山とは無縁だった。



大雪、中岳温泉 1995年8月21日

●1995年(50歳)、夏休みを取って札幌に戻った時、娘2人を連れて、JRを使い層雲峡から黒岳、石室に泊まって中岳、中岳温泉に浸かり姿見の池まで縦走し旭川から札幌に戻った。娘たちは夜空の星の多さと桂月岳での御来光に感激していた。その年仕事が一段落するとともに思い立ってこの年9月、秩父山城の信濃川上から廻目平登山口、千曲川源流に沿って登り五丈岩が

目立つ**金峰山**(5)、2599mの頂上を踏み、国境線稜を巨岩、奇岩が林立する**瑞牆山**(ミズガキと呼ぶ)(6)の頂上(2599m)を踏み、遠く金峰山を振り返り増富ラジウム温泉口へ下山の一人山旅をした。ラジウム効果で冷泉入浴(17度)後はボカボカと快よいひと時だった。

50歳の暮れ、『柏山の会らんたん』に入会した。歓迎会だったか、忘年山行だった訓練山行だったか定かではないが、丹沢山塊のユースンロッジでの泊りがけの山行(どこをどう登ったかは記憶にない)と闇汁まがいの鍋料理と、山のスライド(皆さんあまり見ていなかった)など話は尽きなかった。翌朝、転がっていた空一升壺の多さがその後の覚悟を決めてしまったようだ。同じ時に入会した数人とはその後、十数年もあいだ多くの山にのぼった。翌年の夏の北アルプスの涸沢での夏山合宿から一段とのめり込み、あとは一気呵成にできるだけ時間を割いて第一優先で山を登った。

●**1996年(51歳)**:(7)～(15)9山。この年の夏、お盆山行と称して総勢17人、2泊4日、上高地から北アルプス**穂高岳**(6)で囲まれた懐深い涸沢カール(2400m)でテント2泊して北穂高岳、涸沢岳、奥穂高岳(3190m(7座))をめぐる初めてのハードな山行となった。初めての山中テント2泊の荷物は重く上高地から徳澤、横尾で梓川を渡って屏風岩の岩壁を眺めながら横尾谷を登り標高2000m付近から急な傾斜となり例年より多い残雪に難渋しながら涸沢カール大雪溪末端のテン場に着いた。星が溢れる夜空の下でテント泊ならではの野外での夕餉と宴会で夜遅くまで語らいが続いた。翌朝は雪溪が残るカールをぐるりと取り巻く穂高の山々の稜線を赤く染めて刻々と変化するモルゲンロードが荘厳さで迎えてくれた。北穂高岳へは岩稜の登山路を標高差700m、3時間の急登で登り、滝谷側がすっぱり落ちる絶壁の縁を鎖の助けを借りてトラバースし子の縦走で最も危険なコースを涸沢岳へとのぼった。ほんの少し前に登った登山者が落石、滑落で死亡、目の前でへりで運ばれていった山の無残さを目撃した。涸沢岳から穂高肩の小屋で一休みをして、奥穂高岳の鎖場、梯子を登り日本第3の高峰3110mの頂上の石積みの頂上を踏んだ。戻り日の出の科尔からザイテングラードを下り雪溪歩きでテントに戻った。9時間、上高地に下山したがカッパ橋は観光客があふれ暑く薄汚れた汗まみれの面々の笑顔が集合写真に残っていた。このテント山行を満喫したのが後の山旅にのめり込むきっかけとなった。

夏休みの帰省で札幌に戻り**羊蹄山**((8)1993m)に登った。札幌からJR、バスを乗り継いで倶知安コース登山口から頂上(1408)へ、京極コースで下山8時間、京極温泉につかり札幌に戻る。**八ヶ岳**(9)は何度もいろいろなコースで登ったが、学生時代初めて登った時、中央本線小淵沢から3日かけて編笠山、権現岳、主峰赤岳、横岳、硫黄岳を縦走し中山峠から渋の湯に下山した。ただやみくもに歩き続けた記憶が残るが詳しい記録がない。そのため初回としてはこの年8月、JRの夜行でついた茅野駅の通路で寝袋にもぐって仮眠、一番バスで美濃戸口へ向かい、メンバー3人で文三郎尾根を急登し赤岳(2899m)頂上に登った。尾根を戻って阿弥陀岳を登り返し赤岳鉱泉の山小屋泊りとなり千葉県連の交流集会山行となり、数十人の仲間の賑やかな宴会となった。その後の八ヶ岳連峰は冬の硫黄岳、天狗岳、北八ツ、紅葉時の素敵な山小屋泊まりで稜線散歩など四季折々に渋の湯側からも小海線側からも南八ツ、北八ツとよく登り歩いた。

次いで96年9月、出羽三山のひとつ**月山**(10)、**鳥海山**(11)を、11人パーティで登った。記録は以下のとおり。

『常磐高速、磐城から磐越自動車道・東北自動車道で途中仮眠。』

★日本有数な豪雪地帯の修験者の山「月山登山」(9月1日)・・・・・・

14日：雨続く、朝食後姥沢(標高 1150m)出発、小雨に変わる。08時 月山リフト下駅(冬は積雪 10m を越えるとの話、谷筋は 20-30m となる)→13 分ほどリフト、途中小雨、1 時間の登り節約。 08 時 30 分：リフト上駅(標高 1510m)、登山開始。中腹をトラバース気味にゆっくり登る。お花畑(7 月なら一面)、残雪あり。(今年は雪が多かったので 7 月なら大変?)→牛首までは楽。ここからは、急な登りとなる。足場はよい、ただし時々小雨で濡れているので滑り危険。霧、斜面を這いあがる。風速 10m 前後。稜線は 15m 位とかなりの強風。頂上付近は緩やかに広がっていてガスのなかで初めよくわからず、とえあえず強風とガスのなかで写真撮影。戻るか頂上をめざすかと迷ったが 11 時月山神社の頂上(1984m)を踏んだ。月山神社で頂上料としておみくじと御祓い料で 500 円。小屋で昼食。記念撮影(皆さん濡れて幽霊の如く写っていた。 12 時下山。行きと同じコース。ガスは薄くなり、風も弱まったが遠くまでは見えない。14 時リフト下駅着。熱いコーヒーがうまい。月山のスキーシーズンは 4 月から 7 月。 冬は雪が多く交通途絶とのこと林道(景色がよい)→国道 112 号→国道 7 号→八幡で右に折れて鳥海山の山麓へ進み、湯の台高原を抜けて(鳥海高原ライン)終点駐車場(滝の小屋下)へ。

出羽富士と呼ばれている『鳥海山 (2236m)』は独立峰で日本ではほとんど見られない氷河が残っている豪雪の山である。・・・・・・

14 日 15 時 滝の小屋(5 合目) 標高 1200m 鳥海高原ライン終点駐車場から 20 分、小屋到着、整理。夕食前からご苦労さん会。夕食は思いのほか料理(公営なので小屋代が安い)がよい。その上、小屋の主人の挨拶ではじまる大宴会、不思議な山小屋。外にトイレ、一時かなり強い雨あり、湯船には入れないが身体を洗う風呂あり、全員就寝:何時か不明(飲み疲れの人あり)

15 日 05 時 30 分：起床、準備、かたづけ。朝食 6 時 06 時 40 分：滝の小屋出発(出発時するころ一時雨ありそのごすぐ止む)時折小雨、八丁坂(高山植物の宝庫との話)霧のなかゆるやかな斜面がビロードのごとく広がる斜面が見え隠れする。07 時 40 分:河原宿(夏期間営業)、7 合目。今年は雪が多く、6 月でも軒先まで雪があったとの話。このあたりゆるやかな大地、夏は雪溪の末端付近で高山植物の大群落との話。(5 分休憩) 出発、目前に雪溪が見える。沢の左側を登ったが間もなく雪溪となる。ガスがかかって視界が悪い。念のためアイゼンをつける。斜面はそれほどの傾斜なし、左岸側を快調に登る。雪溪上端着。踏みあとが沢山あってわからず(下りでわかったがこの時は右岸側の道あり)。左側に小雪溪を見ながら沢の右岸の灌木帯に登る(明瞭な登山道)。09 時 05 分アザミ(薊)坂 本格的なキツイ登り山道となる(標高 1900m 付近)チョウカイアザミ多い。途中休憩 09 時 25 分出発、稜線、外輪山 伏拝(ふしおがみ)岳(9 合目)へ出る。外輪山の内側がそれまでの様相と一転して崖が切れ落ちている。東に進み行者岳からハシゴとクサリ急下降、火口壁の内壁に沿ってすすむ。この変化が劇的でおもしろい。崖にイワカガミの紅葉したのが張りつき綺麗。岩がゴロゴロしている斜面に登り神社前にでる。1 時 15 分:鳥海山山頂(新山、2236m)到着、昼食、岩稜のピークがいくつもあり、活火山の様相顕著。往路と同じコース。ただしコースガイド(ボランティア指導員)つき下山、説明が随所であり、鳥海山の物知りとなりながらの下山。登り 4 時間半、残念ながら日本海が一望できなかった。 河原宿: 14 時 40 分→発 15 時、滝の小屋着、15 時 30 分、駐車場発 16 時 17 時 20 分頃:吹浦(ふくら)キャンプ場着、テント張りをほうりだして日本海に沈む夕陽見物。テント設営、温泉で一汗。ちいさな食堂を借りきりで大宴会を催しこの山行を締めくくった。。・・・・・・

10 月；紅葉真っ盛りの甲武信岳(12)は中央高速から信濃川上から千曲川の源流に沿って登り甲州・武州・信州の国境稜線上の頂上(2475 m)を踏み太平洋と日本海をわける分水嶺を縦走、

十文字峠を下った。小屋泊りを選択したのがまちがいだった。紅の時期と週末が重なり山小屋は混んで昼1 昼に二人という具合で、夜中にある泊まり客がとなりの客のいびきがうるさいといさかいとなった珍事があった。稜線で水がないのでテント泊をあきらめたのを少々後悔した次第だが紅葉まっ盛りで天気よく紅葉登山を満喫することができた。

北陸加賀の秀峰 白山 (14)は近くの荒島岳(13)ともに高速道路利用で800kmを超す長旅でまわった。柏を9日2150発、上越道で新潟柏崎にまわりPAで4時間仮眠、北陸道を富山、金沢、福井とまわり荒島岳の登山口勝原に9時40分着、シャクナゲ尾根から頂上(、13時42分、1523m)。眺望はよく明日登る白山の眺めがよい。ただし特徴のない山だった。下山後、白山山麓の一の瀬キャンプ場で真暗の中、テント泊、翌日、地元北國新聞が見事な紅葉の山として空撮した写真が大きく紙面を飾っていたその時、快晴のなかでの素晴らしい紅葉登山となった。

★『白山登山記録』10月11日-12日・・・

11日 04時30分 :市ノ瀬キャンプ場、起床 朝食、余裕のかたづけ。06時25分 :キャンプ場発、途中、すでに紅葉が美しい、一車線の道、別当出会駐車場着、数十台は止められそう。標高1300m付近、一ノ瀬から歩けば1時間(夏の季節はここまで車が入る、ありがたい)。06時50分:別当出会駐車場発 沢におりて対岸の尾根、砂防新道を登る。07時35分 :中飯場、砂防用の車道を横切る。将来ここまで車はいけるのでは。入り口に水場あり。一面の紅葉が見事。対岸の紅葉が美しい。08時05分 :別当覗き付近で休憩、広く整備れた山道で歩き易い(昨日の荒島岳の難儀とは大きな差)。08時20分発:深い沢の対岸一面に広がる紅葉が美しい。09時02分 :『甚の助ヒュッテ』(無人の避難小屋)休憩、よく整備されている。水場(夏場)、トイレあり。見晴らしよし、ナナカマドの紅葉がみごと、紅葉の眺望よし。09時18分 :ヒュッテ発、エコライン緩やかな天国へいくような斜めの登り、途中沢を何度か横切り水場あり。延命水(湧き水)は冷たく味わい深い。最後に高度差100mの急な登り20分。10時18分 :『黒ボコ』 奇岩、中腹に突き出した地点で景色よし、少し急な登りで、『阿弥陀平』着。正面に白山主峰の御前峰が聳える平原、残雪のころなら背景の山頂とよくマッチするのでは。ハイマツのなか五葉坂の一本道の登り。11時00分:『室堂』着、荷物を小屋にあずけ軽装で登る、ガレ場の登り、室堂を見ながら、11時30分 :御前峰頂上(白山頂上(2702m)、山頂から360度の眺め素晴らしい。『本山会長の100名山登山』記念セレモニー 横断幕、祝福。ふるまい酒(特別なので許してもらう)山腹からガスが登り始める、遠くの山に対流雲系の雲発達 13時05分 :御前峰ー御宝庫ー下りー紺殿池ー頂上付近ガスがかかり始める。一翠ヶ池ー分岐、視界悪い。



13時47分 :大汝峰登山組と室堂組と分岐で別れる。14時:大汝峰山頂。ガスで視界悪い下山、14時40分:室堂着。15時30分:山小屋でご苦労さんパーティ(外はガス) 17時:夕食(早すぎる!)。17時45分ケ-キによる祝賀会、打つ上げ花火(ガスのなか) 18時30分:外暗くガス、やることなし、就寝。

12日(土) 06時25分:起床、ガスで視界悪し、ご来迎見え。06時55分:朝食07時35分:室堂出発。-阿弥陀平、この頃からガス晴れる 時54分:黒ボコ観光新道へ分岐 尾根歩き、始め急な下り……小雨降り出す……まともな降りとなる。08時20分:殿ヶ池ヒュッテで雨具着る……途中で雨止む、視界がよくなる、尾根の両側の紅葉の眺め、絶景ポイント。素晴らしい。稜線伝いの歩きのあと、急な下りに変わる。悪路。雨で足場悪い。登りには適さないとの結論。10時20分ようやく駐車場うえ林道分岐着へ到着。10時50分:駐車場発、白峰村御前荘温泉で汗を流し、昼食(白山遠望)、13時37分、去りがたかったが白山山麓を出発。雨、本格的に降りだす。名酒、手取川を購入、金沢にICで高速に乗り23時柏IC、23時30分柏駅西口解散。
.....

年の瀬、東京都での最高峰の雲取山(15)は御祭り登山口から3時間半で三条の湯小屋泊で登った。翌日4時間小雪がちらつく山頂(2017m)を踏んだ。予想外に長くかつ13人の足が揃わず予想外に時間がかりの鴨沢からの予定時間より2時間以上かかり最終バスに間に合うため小走りとなった。けっこうな不満が出て会を止めた会員もでた後日談ともなった。

●1997年(52歳) (16)～(24)9山: 丹沢山(16)は冬の丹沢主脈縦走計画で11名、ヤビツ峠から塔ノ岳(泊)ー主峰の丹沢山(1567m)ー蛭が岳、一八丁坂の頭、東野に下山(8時間15分)と縦走した。首都圏の太平洋側に位置する山々にもかかわらず予想外に雪が深く難渋した。春山の磐梯山(17)を翁島口のスキー場の脇から登り始め標高差1000mをアイゼンピッケルで登った頂上(1819m)は深雪で鳥居の頭だけがでていた。トン汁パーティを楽しみ通りがかりのパーティに振る舞い談笑した。秩父の名峰両神山(18)やせ尾根、鎖場の連続でスリリングな稜線をひとめぐりする最も厳しい八丁峠コースをとり、いつもの足の揃った4人仲間で早春の頂上(1723m)に登った。荒川上流、溪谷美で有名な中津川、中津仙酔峡を奥深く遡り、上落合橋登山口からの自然林の中を八丁峠へ登る。八丁尾根が難所の連続、3時間半で頂上の祠のある頂上(1723m)ヲ踏む。落合橋まで下る4時間半。小鹿野温泉によって柏に戻る。

早春で山開き直前の静寂な時期、鳩待峠から入り4人パーティで残雪の至仏山((19)2228m)に登り早春の枯れ野の尾瀬ヶ原を周遊した。その記録である。

★ 早春の至仏山 と尾瀬ヶ原

1997年

下界は日差しが強く汗ばむ陽気で初夏の季節が進んでいたが、標高1400メートルの尾瀬ヶ原の五月の半ばはまだ早春のまっ只中である。前夜、柏出発で関越自動車道をひた走って尾瀬の登山口の鳩待峠に着いたのが午前2時少し前。沼田インターから深夜の国道120号沼田街道を快調に飛ばし、片品から401号に折れて戸倉まで通過したまでは順調だった。鳩待峠までは細い山道を七曲がりを上っていった結果が、通行止めのゲートに行きついてしまった。真っ暗闇の峠は大清水峠だった。鳩待峠への分岐を知らずに直進してしまったのである。「そういえば、戸倉の街並みの切れるところに鳩待峠……という指示が一瞬みえた。あれか……」とUターンしてもとの道へ七曲がりを下りだした。時間のロスは20分ほど。予想どおりの分岐を鳩待峠に向かって細い道を登りはじめた。深夜の道の途中で、通行止めの鎖を紐といて道なき道に踏み込んだが、途中で道がなくなりまた戻ってと、いろいろ変化を楽しんだ往路だった。後部座席を倒して仮眠していたメンバーは「ずいぶんよく揺れるね」と夢の中。ようやく峠の駐車場についてすぐに仮眠をとった。

5時起床の予定だったが空の具合が少し暗くもう少し墮眠をむさぼりたく5時20分起床となった。軽く朝食をとって出発準備となったが、至仏山の山麓の残雪が予想外に少ないことから、

山の鼻に直接降りるコースを断念して、標高 1591m の鳩待峠から 2228m の山頂往復の 5 時間のキャラバンとした。4 人分の荷物をザック 2 個に詰め変え交代でかつぐことにした（結果的にはなかなか快適）。6 時 20 分の出発時にはすでに雲行きが怪しく、登り始めてまもなくポツリポツリ降りだして、やがて本降りとなった。大木の陰で雨宿りして雨を過ごそうとしたが、一向に止みそうにない。「この天気、どうにかならないの！雨降るって言っていた？」との雨と同じほど冷たい視線を感じながら、山の天気となんとやら・・・とひたすら低姿勢。「このぐらいの雨なんぞ・・・」とカサと雨具の万全の装備での出発となった。嘆きが天に通じたか、それとも天の情けか、間もなく雨も止んで、周辺の山々と眼下に尾瀬ヶ原が見えだした。雨のあとに層雲が山腹を這い上がるように激しく動きまわる景色も、降られた後だけに感慨ひとしおで、幽玄の墨絵の世界を見ているようだ。

まだ 1m を超す雪が残る山裾の落葉樹の樹林地帯の緩やかな登りのあと、針葉樹林が混ざってきて、残雪を豊かに抱く小至仏山のピークが目の前に広がり始めてしばし休憩。やがて針葉樹の原生林の大きな木々の間をぬっての快適な登りのあと、広い雪田の沢田代に着いた。雪解けともなれば湿原で池塘となるところである。豊かな残雪が広大な斜面に一杯に広がる小至仏の東側斜面の山頂側を巻きながらトラバースにして至仏山を目指した。山頂までは予想外に遠く、途中の雨での遅れもあって 3 時間かかった。9 時 20 分、やっと頂上にたどり着いた。残念ながらガスのなか。途中の稜線でみた山々を思い出し、あそこに谷川連峰、あれが・・・と。休憩と食事タイムで 9 時 50 分下山。単独登山者のほか 2 人しか頂上にいなかった。



帰路は稜線に延びる夏道を降りた。小至仏の頂上を越えて往きの道へと合流することにしたが、笠ヶ岳への分岐の指導標がなくやむをえず夏道から雪の斜面にでて、斜めに下りながら、濃いガスで視界が悪いなかで踏み跡を探した。しばしガスのなかで道探しをしたが、幸運にもすぐ下の方から登山客の団の声が聞こえてきた。かなり急だったが雪の斜面をキックしながら降りて登りの雪道にでた。長い下りのあとで鳩待峠に戻ったのが 12 時 20 分。山の鼻に下る予定からは 3 時間近い遅れなので、食事もとらずにすぐザックの荷物整理にかかり、でき次第ということで 35 分に出発。今度は 60 リットルのザックにテント、コンロ、燃料に食料、酒・・・と一式を分担して、さらにシュラフ、マットを持つのでかなり重い。天気はすでに快晴。雪解け水を集めた沢の音が快く響き、春の芽吹きの中の木道を下って山の鼻まで 1 時間、雪はほとんどない。

湿原を囲む山々には雪が豊富に残り、その山々を背景に雪解け直後の冬枯れの下草と白樺林の早春の薄い芽吹きのがらが美しい対比をみせていた。それでも日差しだけは春を通り越して、尾瀬ヶ原を貫いている木道を暖め、両側にはミズバショウの咲き始めの白い小さな可憐な花やリュウキンカの黄色い花の群れが一所懸命に咲きだし二本の木道に寄り添うように続いていた。

冬枯れの野を見渡すと、雪解け水を豊富に集めて湿原を流れる川の両側には、すでに一面のミズバショウの花の群落が広がり、溢れた雪解け水の冷たく透明な流れに水中花のようにゆれていた。背景には至仏山が残雪を抱き女性的なたたずまいの姿で静かに座り一瞬の時間が止まったような錯覚に捕らわれる。湿原のむこうの山裾に広がる白樺林の白い幹の群れの上に春の芽吹きが、柔らかな陽差しで、一見すると夕暮れ時の逆転層にたなびくカスミをかけたように広がっていた。朝陽の中での同じ情景で、まさに新芽の芽吹き直後の淡い色をハケで横にスーッと描いたように

山裾を飾っていた。

雪解け直後の冬枯れの湿原に山裾までえんえんと延びる木道の向こうに燧ヶ岳が聳え、振り返えれば至仏山が山裾まで残雪を抱き居座っているのが見える。山開き直前でまだ訪れる人たちも少なく、静かな尾瀬だった。先頭は正面の燧ヶ岳めざして歩速をゆるめず、後続との差は広がるばかり。大きな池塘のそばの木組みの休みところでやつのことで、捕らえることができた。「荷物が重いので、早く下田代に着きたかった」とのこと。竜宮十字路、竜宮小屋の前でひと休み。あと20分ほどである。下田代15時着。テント場は五軒の山小屋の山側にあたる静かな場所だった。100張できるといふ広さで、テントは10張り以下の余裕。浄化装置付きの水洗トイレ、炊事場が完備された素晴らしいところであった。テーブルもあり、テントを手際よく張ってすぐさま「尾瀬ヶ原の晚餐」にとりかかった。シャブシャブをメインとした夕餉は、快晴の空と五月に爽やかな風の夕日の柔らかな光の中という舞台装置の中で、至福のときを過ごさせてくれた。つい数時間前に登った至仏山を眺め、9時間の歩きのあと快い疲れにビールは実に美味甘露だった。そしてワイン、吟醸酒、…とアルコールが続く。ザックからは次々と珍味が登場してきた。18時半を過ぎるころとなれば日没となり、5月の湿原を吹く風は爽やかさから冷たさに変わってきた。急いでテントのなかに運び込んで宴はなお続いた。かたずけて寝袋にもぐったのが21時。

18日(日)、05時20分起床、寒い。寝袋から出たくない。夜明け前の寒さで外に干した濡れ手拭が板のように凍って、地面は霜柱でザクザク、氷点下まで気温が下がったことを示していた。

「寒さで夜中に目がさめて1枚着込んだ」と。5月の尾瀬はまだ早春なのである。手際よくシャブシャブの汁をもとにお雑炊。味が滲みておいしい。フライが霜でガチガチ、テントは露で濡れてしまったので、濡れとりと撤収に少々時間がかかって07時30分出発となった。竜宮十字路から左に長沢新道に折れた富士見峠コースに向かった。尾瀬湿原の東のはじにあたるこの付近は、一面のミズバショウの世界だった。「静かな尾瀬で三年分くらいのミズバショウを見た」と一同、満足して、いよいよアヤマ平への登りにとりかかった。食料と酒が胃の中に収まったとはいえ、ザックは重く標高1900m付近まで雪が残る急な登りに足があらなかった。

しかしアヤマ平から、横田代をへて中の原に続く稜線は、登りの苦勞を吹き飛ばしてくれるほどの圧巻だった。快晴の空の下に広い草原状の緩やかな稜線が伸びて、右に左に雪を抱いた山並みが遠くに聳えていた。目の前には尾瀬を囲む山々が見え、燧ヶ岳の立派な山容が聳え、前には至仏山が、そして平ガ岳、遠くに会津駒に朝日連峰だろうか。雪深い越後三山が見え、あれが巻機山、至仏山の向こうに谷川連峰が見えるはず、日光白根、皇海山に…。アヤマ平から鳩待峠への通称「鳩待通り」は、四方の山並みをみながら静かな山歩ができる最高のコースである。もう少し季節が進めば湿原となるし、早ければ雪深い静かな尾根歩きとなり、スキーでも尻滑りでもなんでもできそうな、そんなコースであった。もう急な下りもないしと、素晴らしい景色だしということで、木道わきのベンチで、ツマミの残りを総ざらいして、残っていたワインと梅酒を飲み干した。涼風に吹かれながら、まさに自然を満喫した至福のときを過ごさせてもらった。

今年の尾瀬は真冬の雪が少なく、3月から4月にかけて記録的に暖かく雪解けが早く進み過ぎてミズバショウの見頃も例年の六月初旬より1週間以上早まりそうである。越冬した長蔵小屋の記録では昨年の冬は5mを超し10年ぶりの豪雪となったと報道された。この豪雪と春先の低温続きで雪解けが大幅に遅れて6月に入っても湿原の雪が消えなかった。昨年、今年とう2年で両極端の気候が現れ、尾瀬に咲く早春の花にとってひと月近い差がでたのだろう。厳しい自然の中でぎりぎりに生きている湿原が冬の記憶を色濃く残す残雪と春への移ろいの季節の進みを単に正直

にみせた姿であろう。これが平年や昨年の基準をもとに組まれた尾瀬めぐりに人たちをあわせてさせているようである。まさに今年、尾瀬に行くきなら早めがよい。絶妙のタイミングの山行だった。

鳩待峠 13 時着。すぐ温泉へ向かう。戸倉でひと風呂浴びて昼食。沼田から高速、柏に着いたのは 19 時。秋の静かな季節に尾瀬と燧、残雪の尾瀬、至仏山もぜひ来年も、そんな素晴らしさを残してくれた尾瀬山行でした。・・・・・・ 』(1997. 5. 21) 尾瀬ヶ原は夏、秋と何度も行ったがこの時の静寂は別世界に踏み込んだようだった。

・・・・・・

十勝岳(20) **とトムラウシ山**(21) は、「柏山の会 らんたん」の「北海道の山旅」の私を含め 7 名で千葉県柏 21 時発。高速を走り続けて青森に早朝に着き 0730 発のフェリーで 11 時函館着、市内を少し散策、昼食後車を飛ばして羊蹄山麓 16 時着でテント泊。翌日 4 時起きで真狩コースをピストンで羊蹄山を登り、温泉に入り 16 時前には出発したが予定遅れで夜 21 時にやっと十勝岳白銀温泉キャンプ場に着き、急いでテント設営となった。すでに管理人も起きておらず翌日、4 時起きして出発したのでテント代金は徴収されなかった。望岳台から十勝岳(2077m) ピストンで



山頂に 10 時、15 時 30 分下山、白銀温泉で汗を流して、旭岳温泉大部屋泊。山の会の一行は姿見の池から旭岳に登って途中 2 泊でトムラウシに向かう大雪縦走をした。私が車をトムラウシ温泉へ回してヒサゴ沼テント泊で出迎えた。新得で購入したビールとワイン、メロンを雪解け水で冷やし到着したご一行様の疲れを癒した。夜はヒサゴ沼の渚で大雪大縦走の素晴らしさで宴会が盛り上がった。翌日、一緒にトムラウシ山(2141m)に登りトムラウシ温泉に下山。温泉でゆっくりし過ぎて私の札幌帰りと千歳からの東京帰りの 2 人が新得で JR に乗り遅れ

た。残る一行はさらに芦別岳を登って札幌に戻り、函館、青森から帰っていった。まさに山狂い仲間の強行スケジュールをこなしていった。トムラウシ山は素敵でいろいろバリエーションで登れる奥深い山である。山でやまびこ会山行や中央労山の仲間たちとクアンナイ川を遡行して二股、北沼のほとりでテント泊など何度か登った。

南アルプス白峰三山縦走お盆山行で 3000m 付近稜線 2 泊のテント泊山行で広河原から大樺沢コースで**北岳**(22) から**間ノ岳**(23)、農鳥岳縦走した。前夜発夜行と広河原で仮眠が雨のため不十分となり



体調崩したメンバー一人が途中下山し登山口までエスコートして戻り結果的には 1 時間出発が遅れた勘定。朝方まで残った雨が続きの 2 泊 3 日のテント泊の荷物が肩に食い込み大樺沢沿い清流をのぼり二股から本格的なのぼりとなり急登急登で皆疲労困憊、ついにばらばらとなり「もう山には金輪際行かないぞ」と呪いつぶやきながらジグザクの急登を折り返しの先だけ見て一足一足とひたすら足を運び 2890m の稜線に出た。視界が開け感無量だった。標高 3000m 付近の北岳キャンプに予定より 2 時間遅れ、15 時半に着いた。疲労困憊だったが運び上げたアルコールの美味と登山口で借りた鉄鍋(共同装備のコッヘルを忘れたメンバーがいた。下山後返却)での夕食作り、夕暮れの 3000m の天空のテント泊はこの時が初めて急登の疲労を忘れさせてくれる一晩だっ

た。翌朝、御来光を見て日本第2位の北岳(3192m)に登り2名が高山病と疲労で引き返し残り9名で間ノ岳(23) 3189mに向かい、農鳥岳への縦走は天気快晴、刻々と姿を変える富士山から南アルプス、鳳凰三山が眺めは3000mの天空の快適空間を縦走し農鳥岳キャンプ場でさらに一泊、水場が稜線から20分ほど下ったところにあり途中、トリカブトの紫花が一面に咲いておりで印象深かった。大門沢奈良田に向かって高度差2000mを一気に下った。長かった。下山の最後、登山口を目前に全国の山登りをしていたベテランの一人が足首をねんざしてしまった。疲労ともうハードな山行も終りと油断していたとのことだった。

活火山の那須岳(24)は大丸温泉から登り始め、稜線で峰の茶屋(1799m)から右に折れて剣が峰(1030)を往復、火山特有のザクザクの足元を登り返して1145、山頂(1915m)についた。三本槍まで行きたかったがまたのチャンスに譲り、大丸温泉に下山して温泉で温まり柏に戻った。

●1998年(53歳)(25)～(31) 7山:3月、奥岳の湯に駐車、2時間歩いて黒金小屋泊まりのゆったり山行で福島県の安達太良山(25)に登った。翌朝、稜線の牛の背と呼ばれるコルに出たところで強風に煽られザックカバーが風で膨らみメンバーの一人が宙に浮き飛ばされた。幸いケガはなかったが強風時に対応に一石を投じた。10時半、山頂(1709m)。視界なしで残念。薬師岳をめぐり下山、寒かったので奥岳の湯で温まり帰った。

6月、上越との国境の谷川岳(26)を雨の中、トマノ耳(1977m)・オキノ耳の双耳峯に登ったが雨で視界なく一ノ倉山は行かず引き返した。

ハヤチネウスユキソウを見るため7月、小田越えから早池峰山(27)に登り河原坊に下る5時間半17名で廻る。前夜2115 柏を出発、常磐道、東北道を走り、花巻PAで2時間仮眠、早池峰山の登山口河原坊着、車1台を残し、小田越登山口へ向かい07330 登山開始、オオシラビソを抜け0830 一休み。高山植物の宝庫でちょうど見ごろ、ウスユキソウは時折見かけるが、思ったほど多くない。ハイ松の中を進み岩場の最後の急登、鎖場を越えると頂上(1913m)に0940 着。北上山脈の主峰から宮沢賢治の世界を眺望できると期待したがガスで視界がなく残念、登山者多く記念撮影をしてすぐに下山開始。雨で濡れた岩場は滑りやすく難渋、泥と岩でウンザリしながら河原坊(1250)着。下山の途中偶然にも、札幌のときのテニス仲間と20年ぶりに再会、山仲間と札幌から八戸へフェリーで渡り東北の山旅の途中とのことだった。こちらは、早池峰神社に参拝し、花の百名山で有名な栗駒山山麓の須川温泉に向かった、湯治宿の自炊の大部屋泊まり硫黄泉でとても良い湯を二度三度味わった。

山の会らんたんの「北海道東の山旅」の6人のメンバーと苫小牧で落ち合い額平川を遡行し幌尻山に登った。幌尻山荘前テント2泊、幌尻岳(28)から戸蔭別岳縦走した。沢の遡行は30回近い徒渉を繰り返し2時間で小屋に到着、小屋は込んでおりテント泊。翌日小屋発4時半発で尾根コースで登り4時間で山頂(2052m)。幌尻岳山行記録は以下の通り。

★北海道の山旅 幌尻岳 苫小牧から額平川遡行、幌尻山荘(テント2泊)

1998年7月19日

前日の最終便で札幌に着いて朝5時半に出発、札幌発の特急の一番列車に飛び乗り苫小牧着7時30分。改札口にメンバーの出迎えを受けて皆さんと合流。高速を走り八甲田山を往復、夜行フェリーで深夜の室蘭そして仮眠という強行軍なのに御一行は驚くほど元気一杯。温泉とフェリーのな

かでの酒盛りで疲労が回復したらしい。0755、晴れ間がのぞいた苫小牧駅前出発。苫東開発の広い道を一路、幌尻岳に向かった。海沿いに襟裳岬に向かって富川で左に折れる。アイヌコタンのある沙流川に沿って日高山脈に分け入り、帯広に向かう国道を北上、振内で幌尻岳登山口の看板のところからいよいよ額平川林道に入る。林道は間もなく砂利道の悪路に変わった。山頭火の「分け入っても分け入っても青い山」のごとく山深い。家も看板もなく郷も見えない。さらに一車線で崖道となりほぼ1時間、ついに10時45分林道ゲート着。夏休みの始めの3連休とはいえ、想像以上に車が多くゲートのかなり手前で止めた。この混み具合では幌尻山荘泊まり危ないと判断、予定をテント泊りに変更したが、これは正解だった。

1115 出発。林道ゲートをあとに林道終点まで5キロ、ゆったりとした道で途中休憩を取りながら歩く長い道のり。車で林道を1時間、山裾の小屋まで4時間、そして本格的な登りとなる幌尻岳の山の深さを実感する。1320 林道終点の取水ゲート着。ここから沢ぞいの道となる。30分ほどはワラジなしですむ。1350 休憩、ワラジ組ありの沢用の足ごしらえをする。メンバーの一人、最長老の「仙人」の草鞋と白タビが溪流と暗い谷間の幽玄境によく似合う。調子に乗ってこちらも仙人の真似をして、ひょいと飛んだが滑って危なくずぶ濡れになるところだった。クワバラクワバラ。一人くらいドブンを期待していたが（みな自分ではないとは思っていたが……）期待にそえず全員無事だった。

はじめは右岸（上流に向かって左岸）を歩くが、次第に徒渉を繰り返すようになる。水が澄んで夏の沢は冷たくとても気持ちがいい。今年は雪解けが早く、このところ大雨もなく水量は少ない。それでも太もも濡れほどで、増水したら危険な溪流となって遡行できなくなるだろう。水量もほどほどで幸運に感謝。四の沢から頻繁に徒渉となると書かれていたが、気がつかず注意は足元に集中。二十回と少しまで数えたが…



（帰り道、余裕で数えたが徒渉は30回近かった。ただし早朝の暗い溪流くだりだったが）。予定より少しかかってついに15時35分幌尻山荘到着。なかなか素敵なお避難小屋である。詰めれば50人以上は十分収容できそうな広さで無人小屋にしては設備がよい。2泊する組が多くはや満員で、小屋の脇の草地でテントとツェルトを張る。遅く着いた人たち小屋に入れず屋外や床下で泊まって露に濡れた人も何人もいた。水は小屋の中の水道がふんだんに使え、ほどよい冷たさで甘露甘露。1650 夕食。テントの横に食卓を用意、手巻き寿司とマーボ春雨ほか夕食がおいしい、ツマミも。食当の苦労が実る。谷川の清流で冷したビール、酒がノドを通る時の快感。夕暮れの晚餐はまさに至福のときで疲れを忘れる。明日の本番の登りに備え明朝3時半起床のために19時寝袋に入る。テントに4人ツェルトに2人どちらもほどほど。疲れて寝付きが早い。早いもの勝ち。明日はいよいよ幌尻岳本番。

20日 :

（これ以下の部分は仙人記）

起床3時。緯度の高い北海道の夏の夜明けが早くも負う明るい。餅入りラーメンで朝食を簡単に済ませ、日帰り山行の必要品だけをサブザックに入れて0433 出発。今日も快晴の好天である。雲量は0。

登山路は幌尻山荘よりいきなり針葉樹林の中の急登となる。路は木の根と岩の錯綜するゆっくり

休めるような所も少ない直登路である。途中2回ほどジグザグ路となると山腹状の所から0555支線上に出る。これより10分ほどで命の泉(1550m)に着く。すぐに水場があるという。この辺に来ると機もまばらとなり周囲も明るくなる。水場よりひと登りで1700mの地点にくと、樹林帯を抜け這い松と岩のミックスした展望のよい山稜路となる。足下に幌尻岳北カールを俯瞰し、それを右から左へ廻り込むように幌尻山頂を正面に戸鳶別岳までの稜線が急なカール壁へととなって我々の正面に屏風のように展開する。足下周辺は多種類の高山植物の群落が大変華やかで、これがどこまでも続いている。展望は抜群である。0715、1830m地点、ここで15分ほど小休止。

今山行の最高目標の一つ、幌尻岳頂上へ0815に着いた。日高の山々は氷河に削られ急な狭い山頂が多いとの事であるが幌尻岳は例外的に山頂が大きい。ここで約1時間、食事と展望と大休止を楽しむ。ここから見える人工の施設は新冠ダムによる湖だけで後は全て見えるものは日高の山また山である。近くは足下北カールと東カールがカーペットを敷いたように眺められ、そのカール壁に削られた痩せ尾根がピラミッド形の戸鳶別岳まで北へ一直線に続き、その後ろ左また北戸鳶別岳への山稜がつづいている。北戸鳶別岳もなかなか端麗である。

南方にカムイエクウチカウシ山、ヤオロマップ岳、東南方にエサオマントッタベツ岳、札内岳、十勝幌尻岳など聞くだけでもロマンチックな山々が眺められた。快晴に恵まれた展望をじゅっくり楽しんで0910頂上を後に戸鳶別岳に向かう。肩状の2000mピーク0928着。ここへくると右に七ツ沼カールが望まれ小さく2人パーティが稜線めがけて登って来るのが見られた。0945これより急なハイマツの痩せ尾根の降りが始る。ハイ松の枝でむこうずねがきき図だらけになるような路の吊尾根を最低鞍部1005(小休止15分)。戸鳶別岳頂上へは1115であった。

1140幌尻岳と戸鳶別岳に別れを告げ更に北戸鳶別岳への稜線をたどる。その最低鞍部の近くに少ピークがある。下山路はこの頂上付近にあった。このころより幌尻山頂に雲が出始めた。降りまた非常に急な直降下で、樹林の中へ入り展望はほとんどなくなる。途中1回少休止六の沢へ1330着いた。これおより沢を渡り返しながら無事幌尻山荘へは1440に着いた。今日の小屋はすいているようだ。テントを撤収して小屋に入り、寝場所を確保すると後は相変わらずの宴会である。大いに喰い大いに飲んで1915床に着いた。

22日、額平川コースで下山。十勝清水で私だけ下車。一行は道東の山々に向かい、雌阿寒岳、斜里岳、羅臼岳～硫黄岳に抜ける知床連山縦走に向かった。

後立山連峰の雄、**白馬岳**(29)はいろいろなバリエーションで登ったが初回はお盆休みの夏山集中合宿で3パーティ、白馬12人白馬岳集中山行で登った。予備日1日を加え最長6日、唐松岳から不帰の剣キレットを越え白馬、拇池縦走コース、欲張って白馬大雪溪コース、白馬岳から唐松岳逆短縮コース、途中でテント装備を縦走組に引き継ぐ等を含む3コースの交差縦走を計画した。しかし天候に見放され台風並みの大雨で交差縦走そのものが全て無理となった。リフト、ゴンドラ渡乗り継ぎで八方尾根、八方池まで上がったが本降りの雨で、不帰の剣キレット通過は不可能と判断、山ろく一旦戻り、大雨の中でのテント泊は厄介と、青木湖湖畔のキャンプ場でバンガロウの安い大部屋を探し出して宿泊。一泊1300円と値切った。早速買い出しに走り盛大な宴会の泊まりとなった。翌朝4時起きで後続のメンバーと合流、13名全員で大雪溪コースを登り車1台を拇池登山口に回した。大雪溪の登山口猿倉に向かったが、道路が大雨で閉鎖中。長引くなら温泉にでも浸かって帰ろうかと相談していると、2時間後、道路が開通した朗報が入り安堵した。大雨の後の大雪溪は落石の危険が増すのでコース選びを慎重に十分注意して登ることにした。

8時間近くかかって山頂近くの白馬山荘着。大雨で登山者が少なくゆったりと宴会を楽しめた。夕食前に山頂（2932m）にでかけた。翌日杵池コース組と分かれ、私を含むメンバーは白馬三山の杵子岳、白馬鑓ヶ岳を廻って下山。日本海が見え五竜・鹿島槍の眺望がよく、2100mの高所ある鑓ヶ岳温泉によった。露天風呂は思ったより広く眺望よし。下山後さらに温泉で休み、帰りの高速道路が混雑渋しそうなので、お盆休みのJAの建物の軒先を借りてテント仮眠、白馬を立て柏に戻った。その後も白馬連峰はたびたび訪れ、5月初めの連休に蓮華岳、白馬に縦走する計画で杵池から登った白馬大池脇で雪上テント泊をしたが、直撃された春の嵐で2つのテントのフライが飛ばされ季節外れの大雨でテント内でもびしょ濡れとなり、寝袋まで濡れる有様で翌朝、急遽撤退下山した山行となった。一方、労山千葉県連の登山学校の実習登山で快晴の中、白馬大雪溪から白馬岳、白馬大池、蓮華温泉（天然の野天風呂が山の斜面に並びつくと快い・・・）まで縦走した。

北アルプスの笠ヶ岳（30）2897m）は北岳以来の厳しい山行となった。前夜発で高速道を松本で降り、安房峠トンネルを抜け飛騨高山方面に向かい途中で右に折れ北アルプスの登山基地、標高1140mほどの新穂高ターミナル着。6時半出発、鏡平に向かう林道を1時間、冷たい湧水でのどを潤しいよいよ難攻不落の笠新道の登山口で折れて笠ヶ岳頂上まで標高差で1750m。笠新道は稜線まで一気に高度差1350mを急登急登のジグザグ登りとなる。出発して4時間、2400m付近で睡眠不足と急登連続でメンバー7人のうち半分が途中2450m付近で一時時ダウン、岩陰で爆睡するほどで1時間ほどの休みをとった。一旦緩くなった杵子平らから急登し稜線にやっとたどりついた。稜線歩きは槍を後ろに見ながらゆったりと歩き、笠新道の辛さがうそのようだった。出発してから9時間半、頂上直下の小屋にたどりついた。翌朝、頂上からの御来迎は見事で槍ヶ岳の稜線を前景に空が赤らみ始め小槍の肩付近から太陽が登った。神々しさの一言に尽きた。頂上から6時間半かけて1900mを一気に急下降して槍見温泉に下った。長かった、暑かった。槍見温泉で槍ヶ岳の頭を見ながら汗を流して猛暑の都会に戻った。



新潟県の巻機山（31）は深夜の高速関越道を走り群馬と新潟の国境、清水峠に出て桜坂登山口で仮眠、6時半出発、ヌクビ沢コースで主峰割引岳（1967m）を登り前巻機の避難小屋泊。2日目、牛ヶ岳をピストンして下山の紅葉登山となった。

●1999年（54歳）（32）～（39）8山：蔵王山（32）は3月、蔵王温泉泊まりでゲレンデスキーを楽しみ、メンバー7人でリフトで地藏岳山頂上に登り、地藏岳、熊野岳、アイゼン、ピッケル装備でのお釜の周辺を回り刈田岳を（1841m）に登った（11時）。頂上は深雪の中で鳥居は頭先だけが姿を現していたほど深雪に覆われていた。往復4時間、熊野岳から刈田岳まではゆるやかなコースで吹雪となると迷い易いのでお鉢の崖がわに柱のような木があり危険防止の目印にした。刈田岳は東北の山に行く途中で蔵王スカイラインから小1時間で往復することもできた。

雪がない季節は簡単に火口のお釜を見ることが出来、活火山の姿を垣間見ることができる。

筑波山(33)は茨城県の筑波に5年ほど住んでいたので何度も登ったが百名山で最も低く(877m)、頂上近くにかつて筑波山測候所(現在は廃止、特別地域観測所として無人)があり南岸低気圧による東京付近の大雪予報の空に突き出したセンサーの役割をしていたほどで、関東平野から良く眺望される山となっている。この山、6月、労山千葉県連のメンバーと一緒に登った。この山がなぜ百名山に選ばれたかは疑問。

南アルプスの**聖岳**(34)は7月、山が深く長野県側の駒ヶ根ICから狭い遠山川林道(光岳登山の易老渡登山口が途中にあり、よく林道崩壊で長期間不通となる)を便ガ島登山口から登り始める(0805)。沢渡では川が増水していて渡河不可能だったので荷物運搬用のケーブルを2人ずつ載って自力でロープを引っ張り渡った。9人メンバー全員、結構楽しんで渡った。登山道ではヒルの猛攻を受けつつ蒸し暑さの中、標高差2000mのきつい長い登り、何カ月ぶりの山行でトレーニング不足により長丁場の登りで足がつり難渋。標高差1400mの聖小屋に着く。ヒルは登山者の先頭の体温を感じて木の上から落下するので、2番目以降に被害が及ぶ。東日本大震災の災害支援ボランティアの時も沢ですいぶんヒルに食いつかれたが靴下の上からの猛攻で後で見ると脛が血だらけだったが痛みがなかった。いつの間にか血を吸われていたことになる。小屋近くのアザミ平はお花畑でフウロウやキンバイ、ウスユキソウのお花畑が迎えてくれた。聖平小屋1515着。聖平の山小屋2泊はハンバークとカレーでかねてから評判が悪いので有名な山小屋(1軒のみ)を地で行く殿さま商売、そのとおりだった。南アルプスは登山客も少なくやはり大変なのだろう。翌朝、04時起床で5時出発、小聖から前聖岳まで700mの急登、3013m(3000m峰では本州最南端)8時。そこから奥聖岳は往復1時間、荒川三山が目の前で北に向かう400mも下る縦走路が見え百間ボラの山小屋が小さく見える。引き返して小屋から南に足を伸ばし南岳を通り200名山の上河内岳へ、1235頂上。聖岳のどっしりとした大きな山の姿が目前に聳える。下山の途中、天気が良いので標高2500mの草原で昼寝、見えるのは青空、聞こえるのは風の音のみとゆったりと南アルプスを堪能、小屋に戻り16時から2日目の夕餉と宴会。3日目、4時起き5時出発、ひたすら下り、再び荷物用のリフトで渡河し便ガ島登山口へ0915。飯田の砂払い温泉により柏に20時40分戻り。

北アルプス**薬師岳**(35)と**黒部五郎岳**(36)は7月末の週末山行を足の揃った3人で強行日程、金曜夜発で高速を飛ばし途中道の駅で2時間テント仮眠。翌朝0650登山県側の折立登山口着。軽量化でシュラフカバーのみ持参のテント泊。太郎平小屋のコルでテントを張り、その日に白いガレの尾根を薬師岳(2926m)ピストン、眺望は素晴らしい。朝、登りは初めて9時間でテントに戻る。夕暮れを味わいながらお酒で夕餉。明日の日程がきついで早寝。翌朝2時起床で**黒部五郎岳**(36)をピストンしてすぐ折立に下山(1650)。帰路、温泉で汗を流したが千葉県に戻ったのが深夜2時。ほぼ24時間の行動、仕事なら過労死レベルだと冗談としながらも、私より年上の二人も月曜朝には出勤した。山狂いでも今回の百名山の中で最も過酷な山旅だった。満天の星と月明りのもとでの出発し北の股岳を越え黒部川源流の「上の廊下」の源流赤木沢が眼下で大きなカールを抱く**黒部五郎岳**(2840m)に立った。お花畑が咲き乱れとライチョウの親子に出迎えられた楽園からの鷺羽、水晶、後立山連峰の展望が素晴らしかった。

甲斐駒ヶ岳(37)は遠くから見ると雪が積もっているような真っ白の山頂部で目立つ山塊。

この山行は記録的な豪雨に見舞われ危機的な状況になったことに尽きる。8月のお盆山行で広河原 0515 着、シャトルバスで北沢峠に向かいでテントを張って北沢峠 0805 発。0905 仙酔峠、ガスの切れ目から時々、麻利支天が顔を出したが駒津峰（1100）あたりから激しく雨が降り出し急な登りで苦しむ。1240 やっと甲斐斐駒の頂上（2967m）を踏んだ。全く展望がきかず寒いのですぐに下山開始。双児山付近通過ごろから土砂降りとなり雷鳴も響き下山路がドロドロの激しい流でずぶ濡れ、泥水で登山靴の中もドロの靴状態。四苦八苦して北沢峠の登山口戻ったがテントは流失寸前で即撤収。上の方に移してその日はテント泊まり。豪雨でいつ交通止めとなるかわからない状況だった。これで最終となりそうだと言われたて乗ったシャトルバスは深い谷を縫って走る南アルプス林道は片側が深い谷にとなり崖側から激しい沢水が道に溢れかろうじて広川原まで脱出。仙丈ヶ岳の計画をあきらめ帰路に着いた。東京に戻る中央高速道、山越えの県道・林道が全て閉鎖、ついには富士山を2時間も大廻り迂回して太平洋側の東名高速道路にでたがこれも全て通行止めで完全に退路が断たれていた。帰るのを諦めて途中のお盆休みの無人の貨物ターミナルの荷台を見つけて1泊分が残る食糧、酒類を全部だしてやけくその夕食兼大宴会となった。深夜開通したニュースを聞き高速道路を走って東京経由で朝帰りとなったとんでもない山行となった、この豪雨は神奈川県で400mmを越し増水した川で18人が流されなくなり多摩川、荒川が増水で河川敷まで濁流で一杯となるいっぱいとなるほどの豪雨だった。

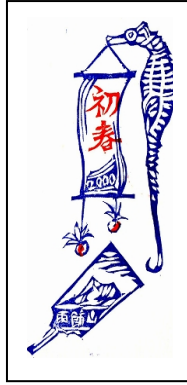
日本海に近い新潟県の西のはじめの頸城山塊の一つ雨飾山(38)は大糸線を挟んで白馬岳に対峙する山で、雨や雪の多い「あまかざり」という響きがぴったりの静か山で、10月末初冠雪直前のその名の錦繡の紅葉真っ盛りの山を晩秋の柔らか光の木もれ陽の中の登りだった(1963m)。独立峰なので360度の眺望ですでに頂きを真っ白に冠雪した後立山連峰から槍ヶ岳まで遠望。白馬から蓮華岳と見飽きない。

★上越の名峰 紅葉真っ盛りの山 雨飾山・・・ 日時：1999年10月31日

前夜発日帰り5人。雨飾山に魅せれたのは白馬から蓮華温泉への下りで雲間のかすかに見えた頸城山塊のなかの一つとして遠望したときである。「あまかざり」という名の響きと日本海に望む長野県の最北端の新潟県境の妙高、火打、焼山と連なる「くびき」山塊のひとつ、登山口が小谷（おたり）温泉と名前だけでも血が騒ぎそうな山である。紅葉も最終盤となって日本海に面する雨飾山なので、木枯らしが吹いて一夜にして初冠雪に覆われ冬枯れの山となってもおかしくない季節、急な山行で参加者は5人。30日の22時高島屋前発予定だったが手際よく出発は5分前。常磐一関越高速も順調、0時15分SAで仮眠。3時半起床出発。上信越道の妙高高原ICで降り（4時45分）、妙高高原の山麓を廻る林道で標高1500mの乙見山峠を越えて小谷温泉に向かう。夜明け前の暗闇のなかを、果てのない悪路にゆられながら峠のトンネルをめざした。間もなく雪で閉じられるだろう寂しい峠だった。峠を越えると急に視界が開け、朝日が登り柔らかな陽ざしのなかに紅葉や落葉松の黄葉が山肌一面に広まっていた。小谷温泉のすぐ手前で右折、登山口に向かう。40分ほどの歩きの省略となる。

夜明けとともに雲が消え天気は快晴。06時20分、雨飾山登山口着。広い駐車場となっており、まだ時間が早いせいか車は思ったほど多くなかった。身支度と朝食、06時55分出発。もっと寒さを覚悟してきたが、ことのほか暖かい。登山路は、大海川の沢から尾根を越えて上流の荒菅沢を

渡り、尾根から山頂に向かいコースである。登山口からしばらく平坦な道を歩くが、やがての沢沿いの道となる。最近の大雨で増水しており、木道が流され道が途切れ、道なき山沿いを歩いたり、水をかぶった木道を越えたりで難渋。ほどなく尾根道にたどり着き急登りがはじまった。ここからは足元もしっかりして紅葉真っ盛りの木々の間を順調に登る。ブナの黄葉や紅葉が美しい。07時50分休憩。荒菅沢に下るまえの展望点で急に視界が開ける。紅葉の折りなす山々が折り重なっている。手前が紅葉の朱、遠くに黄色の山腹、白樺だろうか岳カンバだろうか、無数の冬枯れの



木々が朝日に白く輝いていた。08時35分しばし休憩。頂上は見えないが、紅葉の名所だけありしばし風景を堪能。直下の「布団菱」の岸壁と稜線が見える。これから取り付く尾根に点々と登山者が見え隠れしている。荒菅沢は冷たい沢水で気持ちよい。10月の最後日というのに暖かく登るにつれて、ついには半袖シャツ1枚での登りとなってしまった。

沢を越えると先ほど見えた一直線の尾根の急な登りとなる。ひたすら登る。08時55分休憩。途中から尾根は両側に切れ、左右に視界が広がり、高度感もあり、山々の紅葉の帯びが山麓から縞模様となっている有様が眺められ最高である。危険ではないが岩をよじ登りながら尾根の上部にできれば、頂上が目前となる。ササが広がる緩やかな稜線にでると、風が強くなり体感温度が急に下がってきた。1枚1枚重ね着しながら頂上に向かうと、右側に糸魚川の町並みと日本海がすぐ近くに見えたが、空を反映してかなざか暗い色だった。雨飾温泉への分岐を過ぎて、最後のひと登りで10時30分、頂上に着く。頂上は20人程度がとどまれる広さで、賑わっていた。空は秋晴れで日差しは強いが、さすが西風が強く寒い。雨飾山は独立峰なので、360度の視界だった。正面(どちらが?)の稜線に真っ白な雪を抱いた後立山連峰、その向こうに槍ヶ岳まで遠望でき、この夏に登った白馬から蓮華の山並みを見ることができた。頸城山塊の焼山から妙高が見え、あれが戸隠……と見飽きずに時の経過を忘れていた。雨飾山は双耳峰で南峰が三角点。小さな石仏と祠だけの寂しい北峰はすぐ近く。初冬の風は冷たくすぐに退散。後ろ髪を曳かれる思いで11時30分山頂発。同じコースで下山。途中12時25分休憩、荒菅沢で小休止。見返りの展望点で紅葉の花襖を見納め。朝日の時に比べ光の角度と陽差しの強さが違うとともに、登り下りの目線の違いなのか、数時間前とでこんなにも違うものかと思うほどの、変わった紅葉風景が広がっていた。13時40分休憩。ずいぶん降りてきた。登山道に左右から覆いかぶさる紅葉の木々がトンネルのようだ。小春日和の柔らかな日差しが逆光となって、紅葉の葉裏がことのほか美しい。その向こうに冬枯れ白樺の木々があって、皆さんにわか詩人の境地。登りの時に苦労した沢の木道をかけ直しながら最後の楽しい道行き。登山口に無事14時20分着。まだ歩き足りない?と言い出だしそんな山行きでした。一汗を流しに村営(?)の野天風呂に向かった。寸志を入れる箱だけが置かれている着替え小屋があるだけの木々に囲まれた野趣溢れる静かなお風呂だった。新しくできたらしく岩囲いの10数人入れる本格的なもので、湯の温度も適温。女性用はやや離れてヨシズ囲いで独立していた。ブナの大木が黄色に染まり山ブドウが巻きつき白樺の木々、カエデの緋の紅葉が秋空にはえる、紅葉の原生林の風情のなかで、ささやかにビールで乾杯。15時40分、小谷温泉出発、途中混雑を避けて北上して糸魚川経由で北陸自動車道、最

近開通したばかりの中合から信越道をへて(16時55分)柏に向かう。紅葉観光の車で渋滞、途中下車で別れる。柏、22時半。往復11時間の旅でしたが、紅葉の名峰を十分に楽しませてもらった。

深田久弥も3度目で山頂を究めたとのこと。「雨飾り」は、新潟側から見ると柱状切離が雨が降っているように見えるから、そう呼ばれていると聞いた。もし機会があれば今度は新潟側の梶山新湯雨飾温泉に泊まって、このいわれを確かめながら雨飾山を縦走して小谷温泉に下だる道を歩いてみたい。秋の初冠雪直前のはかなさと鮮やかさが同居している紅葉のころ。そんな夢を抱いた山旅でした。・・・・・・・・

九州最南端の開聞岳(39)は、は海に突き出た見事な形の火山でJR開聞駅からゆっくりと山麓を歩き登山路は螺旋状に山に登り一周すると視界一杯に海が広がる頂上(924m)に突然でた。

●2000年(55歳)東京から札幌へ(40)～(42)は3山。転勤前、厳冬期の2月、雪山登山となった蓼科山(40)は、前夜発途中仮眠し諏訪ICからビーナスラインで女神茶屋、蓼科山登山口へ。07時出発、北八ヶ岳に連なる独立峰特有の頂上(2530m)付近の強風に悩まされ、岩ゴロで雪が積もり一直線に登る急な登りで難渋、最後の300mが苦しい。冬山装備で懸命に登ったが頂上でも視界なく真っ白け、標高差830m、往復7時間。下山後、ピタゴラスロープウェイで上がり縞枯山荘泊で北八ツガ岳に転じた。

4月札幌へ転勤。直前に有珠山が突如噴火した。技術系の責任者として有珠山噴火対応で忙殺。転勤とともに有珠山噴火の大きな渦に巻きこまれ、8月の夏休みが終わる頃には何とか落ちつきが見えてきたがこれからは少し山を本格的に思っていた矢先、自然はイタズラなもので、9月4日には今度は駒ヶ岳が眠りから覚めて小さな噴火を始めた。その後4、5回小噴火を繰り返し、地元の測候所の廃止問題とからんで大きな騒動になり、100年ほど前に駒ヶ岳は小さな噴火を繰り返したあと20世紀の日本で最大級の噴火をして周辺の村々に有珠山噴火以上の大きな被害が出てしまったからである。そのため地元は当然ながら噴火が心配で測候所の廃止問題などはもってもほかと駒ヶ岳の地元の町長さんや議員さん、国会議員の方々も反対で何度も何度も説明に赴いた。朝一番の特急に乗り夕方帰り、という厳しい行政対応で明け暮れ半年が過ぎた。まさにアッという間の1年となった。ひと段落したところで札幌中央労山に入会。

★クワンナイ沢からトムラウシ(2回目)山行・・・8月11日～13日

『札幌中央労山のお盆山行、軽登山企画の大雪山系のクワンナイ沢遡行、トムラウシから化雲経由で天人峡温泉の戻るといふ、2キロに渡って1枚岩の滑が続く日本でも美しい沢の一つに魅せられ、また源頭を詰めてトムラウシとの再会を楽しみに、前夜発、山中2泊のハードコースへの挑戦でした。メンバーは5人。

雨の天人峡の駐車場に深夜2時過ぎに着いての車中仮眠、前日の大雨による増水で流れが速く、沢の遡行を断念しようかと判断の迷うほどで6時出発を9時近くまで遅らせて

のさい先の悪さからのスタートでした。天人峡温泉から沢に入るとあるはずの林道はブルで削られ、沢に降りるまで泥濘のヤブコギと高巻きからはじまった。荷物が重く、やっと沢の遡行が始



トムラウシ、北沼

ったが、やはり前夜の雨の増水で水かさが増し難渋し、数え切れないほど渡渉、深みに阻まれ、胸まで浸かっての岩のヘツリ、カニの横這い、足場をさがしながら一步一步探りながらの歩き、大滝は巻き道を急登し難渋、小滝では滑って滝壺にドボンと冷たい水流のなかでの冷や汗を流しました。急流では腰を越えると渡るのが大変で、どうしても渡らねばならないところが何度も現れ、そのたびに先頭のリーダーがザイルを結んで先発してもらい、川幅一杯に20mザイルを張って固定、その後をメンバーがスリングをつけて渡ることの繰り返しでした。ザイルは川に直角に張るのではなく、川下側に向かって張るのが原則という川渡りの原則を忠実に実行、沢入門の指導を生々しく実戦に適用となりました。確かに自分の腰を越えるあたりから急に水流に押されて危険となり、転ぶと危険ということで、足で少しずつ先を探りながら渡るのでもとくに時間がかかってしまった。テントなど共同装備と山中2泊分の食料、アルコールを背負っての増水した沢遡行で、渡河に時間がかかり16時にやっと疲労困憊で二股のテント場着。焚き火で焼かれたヤマメの香ばしい香りがただよう隣りのテントを横目に急いでテント設営、恒例のアルコール尽き夕食で早めの就寝。

2日目は4時起きで沢の核心部へ踏み入れました。クワンナイ川の核心部は大滝とナメで、およそ2キロにわたる『滝の瀬十三丁』と呼ばれている一枚岩のように延々と伸びて、膝くらい深さの水流が奔流のごとく流れ、童心に帰った心持でビシャビシャと飽きるほど歩けるという素晴らしいところでした。5人くらいでも横一列で歩けるほどの川幅で、早朝の柔らかな逆光のなかで大きなザックを背負った人の列のシルエットが浮かび、周辺の暗い緑の木々とのコントラストに残っていました。沢歩きを満喫し、沢を詰めて源頭に達すると傾斜はゆるやかとなり、雪融けとともに現れるリュウキンカの群落が出迎えてくれた。トムラウシ縦走路の稜線上、天沼付近にでて一休み。トムラウシ頂上近くの北沼で旭岳からの縦走組のパーティと合流、湖畔でテント2張り、ピストンでトムラウシ山頂を往復した。雪渓が残りトムラウシの懷に隠されているような北沼は青く澄み切っており、雪渓が落ち込む湖面の水面が深い青色で縁どられ美しい神秘的な湖面です。南沼キャンプ場は にぎやかだがここは静寂そのもの。ふつつここはテント場ではないがトムラウシ経験組が秘密の水場を知っていたおかげでテント泊ができた。北沼は2度目の出会いでしたが何度みても魅せられます。しばし北沼の冷たい水に足を浸して思いに耽っていたがあちこち虫に刺されて苦労しました。トムラウシ山頂が目前に迫り漆黒の夜空にお月様と無数の星が輝き静寂そのものでした。孤独な作業は夜のキジ打ちもここでしかありません。帰りに天人峡への下山はヒサゴ沼の稜線から化雲岳を通る16キロの長丁場。長い長い下りを走るような下山でした。皆さん速い速い。5時間ほどでうんざりするほど山に囲まれた忠別川の最奥の天人峡の温泉でひと風呂、3日分の汗を流して札幌に戻った。』

.....

★知床縦走：羅臼岳・・山行報告 9月15日から17日

前夜発、道路を牛の群れが横切るのを待って先急ぐ道東の風物詩を楽しみながら知床半島の付け根、岩尾別木下小屋前でテント泊。知床連山縦走の最初の羅臼岳(41)に登り、三ツ峰の先でテント泊。硫黄山から知床五湖へと縦走下山した。

『9月下旬に軽登山企画(これで?)初秋の知床縦走に行きました。前夜札幌発で途中まで高速を使って深夜の道を車で7時間の強行軍で知床、岩尾別の駐車場に午前3時着。テントで仮眠、羅臼岳から硫黄岳まで縦走して山中泊(2泊目は下山後泊)での縦走でした。それぞれテントを背負って4パーティ20人の大所帯での縦走でした。9月の季節は稜線では水場がないので

水持参での縦走となり60リットルのザックとともに重い荷物でした。勿論、山小屋がないのでアルコールが加わり一層重くなります。1日目は雨で濡れてさらに重く足も重い。それでも羅臼平に荷物を置いてピストンで羅臼岳の頂上(1660m)を往復して、三つ峰のテント場までたどりついた。2日目もガスと小雨でついに視界に恵まれず、右に見え続けるはずの国後島の姿はついに見ず終いでした。風に吹き飛ばされながら硫黄岳を通り下山した。南岳から知円別岳の稜線はどうか乗り越えたが、硫黄岳の途中の両端が切れたコルのところで風速20mを越える風でしばし前に進めず風の息をみて2人ずつ必死で越えたものでした。硫黄岳の直下ではさらに風が強くなり頂上を諦めざるをえなかった。山を回る風が強くなり前に進めず岩の陰に身を伏せて動けず、動くとなんか風で飛ばされ宙を飛んだ。以前、3月の安達太良だったと思いますが風に煽られて転んだことがありますが、それ以上の強さで重いザックを背負ってもフワッと浮いて岩にたたき落とされるのです。4人ほど飛びましたが、幸い傾斜がゆるくケガはかすり傷程度だった。人は簡単に浮くものですね。下山してカムイワッカの滝を見下ろす尾根を下山しましたが、ついに温泉には入らず終いでした。真っ白けの山行でした。下山した下界は皮肉にも快晴でした。悔しいので帰りがけに車で知床峠まで戻って見ましたが、やはり中腹以上はガスの中でした。機会をみて再度挑戦をしなければおさまりそうにありません。ただし残雪期で水がある頃がいいですね。縦走には3リットルは必要で重いです。運動不足と筋力不足でやはり厳しい山行となってしまいました。が濃霧で真っ白け縦走で国後島の姿が見られず残念、知円音別岳から硫黄岳の間の稜線、コルで強風のため匍匐前進でもなかなか渡れず風に飛ばされる経験を始めて味わった。カムイワッカの滝に寄りたかったが下山、その日に札幌に戻る』・・・・。



雌阿寒岳(42)は火山観測調査に同行させて貰いオンネー登山コースで頂上(1530m)へ。活火山の火口近くで地熱観測を実施、自然の息吹を直接見ることができた。この火山はまさに生きており時折、小噴火して登山禁止となるので情報をよく確かめる必要あり。

●**2001年(56歳)**は、札幌勤務でこの年、北海道の山々を登ったので百名山は1山のみとなった。4月末の連休、新道コースで春山の芦別岳を登った。半面山で目の前にスパッと切れた稜線とその先に頂上への雪面が迎えてくれた。5時間半で頂上。山頂直下少し旧道に下り稜線でテント泊。天気が良く雪に覆われた周辺の山々の眺望は絶景。夜明けは頂上付近泊まりの醍醐味、中央山地の山並みの向うから雲間が赤ら僅かに見えた。下りは早朝の低温で凍結し表面がガリガリとなった急斜面をなんとか耐えて、半面山を越えて新道を下り、下るにつれて最後は半そで姿での下山となった。



8月、日高、カムイエクウチカウシ山に挑戦。ピョータンの滝キャンプ場で前泊して4時起き、札内川七の沢出合近く標高600mから沢を遡行開始(0605)。札内川本流を遡上したが何度も渡河したが幸い流は浅く順調に八ノ沢出合についた(0745)。ここから直角に折れて八の沢を一直

線に遡行、900mの三俣で休憩（0845）、三段の滝から標高差 500mの沢沿いに急登、1130 にカムエクの東斜面の八の沢カールに着ついてテント設営。近くにワングルの数名が熊に襲われ遭難した石碑あり。1150 頂上へ向かう。稜線に出るとピラミッド峰の眺めが素晴らしく、1320 カムエク頂上を踏む。天気は素晴らしく 360 度日高の山並みが見渡せる素晴らしい眺めだった。1515 カール戻り。カムエクの雄大なカールに抱かれ、お花畑と清冽な水の流れが聞こえる快いテント泊だった。0545 カール発、10 時七の沢出合に戻り温泉で汗を流し札幌戻り。夏の大雪山(43)は 旭岳 2290m) を登り北海道の山々を登った。その後、何度か登った。

●2002 年 (57 歳)：転勤で 1 年間名古屋勤務となったので地の利を生かして (44) ～ (48) の 5 山登った。関ヶ原近くの伊吹山(44)は 4 月末、三之宮神社登山口 0905、林間コースで 1 合目はパラグライダー訓練場、草つきのゲレンデ、見晴らし台(ゴンドラ終点 780m)4 合目リフト終点、ここから登山者が激増し本格的な登り、8 合目、頂上すぐそこ、頂上 1377m、1200。1420 のバスに間に合うように急いで下山、5 時間で往復、名古屋に戻る。

岐阜県側の本曾福島コース、バスの終点の大原 1030mから標高差 1900mの本曾駒ヶ岳 (45)を急登急登で一気に登ったが 8 時間かかり疲労困憊で 2828mの玉窪小屋へ。翌日頂上 (2958m)を踏み、宝剣岳の岩峰を登って伊那前岳から駒ヶ根側に縦走下山。

★『 本曾駒ヶ岳、2002 年 8 月 3 日 4 日』 山行記録・・・・・・・・

『こちら名古屋で山の会にまだ入っていないので、もっぱら一人登山と温泉をあわせてぼちぼち登っています。5 月の連休の後にはもっぱら伊吹山や鈴鹿山系の御在所、藤原岳&温泉と日帰り登山を楽しんでいました。夏休みの 8 月はじめ本曾駒ヶ岳を岐阜県側の本曾福島の間から標高差 1900mを 9 時間かけて登り、翌日に宝剣岳から長野県の駒ヶ根側に縦走下山。

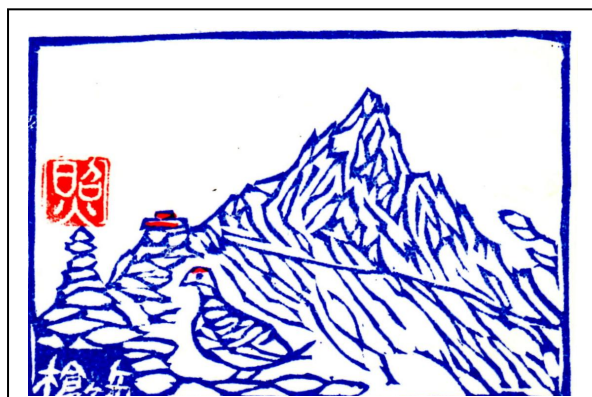
8 月 3 日 07 時 10 分 JR 名古屋発からの「特急しなの」で 08 時 33 分本曾福島駅着、バスで 9 時 30 分に大原バス終点（スキー場まで行かない）着。身支度をして歩き始め舗装道路を新和スキー場登山口まで登り、10 時 40 分に 4 合目？本曾駒ヶ岳登山口（新和コース）で 1400m の標高、ここから本格的な登りで最初から急登となる。笠が岳の笠新道のように、11 時 15 分に清水湧く『力水』について大休止、標高 1700m。ここまで胸突き八丁で 2100mの五合五勺くらいから傾斜が少しゆるくなり稜線を登ることになる。7 合目、2400mの避難小屋（休止中）、ここから岳樺の林のなかを歩く緩やかな登りとなり、15 時に 8 合目の冷たい沢水に出会い、疲労困憊の身に救いの休息。2600mからあと標高差 150mの 9 合目の稜線にある玉窪小屋が見えてきたがまだ遠い。最後の急登。登山口から遠い遠い、疲れたに尽きる。16 時、9 合目 2756m の小屋に着く。まだ山頂小屋まで 150m。16 時 40 分について 2900mの頂上直下の本曾小屋に着く。雨ではないが視界は悪い。登山口から標高差 1900m、本曾福島コースの 7 時間を超えた登りが終わりほっとした。すでに限界、倒れるように……。あと標高差 56m先の山頂は明日に延ばした。4 日 05 時 40 分小屋発。06 時、本曾駒 2956m 山頂。30 分ほど鎖場と壁が連続、宝剣岳 07 時 30 分、2931m の山頂は狭い。戻って伊那前岳から稜線を縦走、清水平（09 時 47 分）経由、蛇腹沢登山口、林道で北御所バス停 11 時。予定より 2 時間早い。駒ヶ根でゆっくり温泉で汗を流し、高速バスで 2 時間、18 時に名古屋に戻る。久しぶりのハードな山行となった。

槍ヶ岳(48)は 3 度登ったが初回は名古屋から夜行で上高地へ、槍沢コースで登った。

★「槍ヶ岳 すれ違い登頂」

2002年9月・・・

「お盆山行の『荒川三山』はどうだった？」とらんたんの山仲間に電話をかけたのがこの始まりだった。「柏山の会も健脚の3人が揃ったので、さぞ強行軍だったのでは？」との問いに「荒川三山から聖岳、茶臼岳まで縦走、それも一人一人テントもちで最大10時間行程のハードスケジュールの計画だった。途中、登山靴が壊れるし、結構のアップダウンで、茶臼岳を目前に聖に



登って樺島に戻った」との答えだった。荒川三山でも大変なのに・・・と話ながら、「これからの山行予定は・・・」と話が移ったとたん、明日木曜日(9月19日)の休みを利用して、懸案の槍ヶ岳に登る予定とのこと。「何、明日?」。19日に午後に新穂高温泉口から槍平小屋の横にテントを張って、20日の早朝から登り初めて槍の頂上に昼前、ピストンでその日に下山、柏に帰る計画だという。偶然にも、私も懸案であった槍ヶ岳を連休前の静か

なときを狙って計画を立てていた。19日の夜行で上高地に入り、20日の早朝に上高地側から登り始めて午後3時を目標に山頂に立って、翌21日に新穂高側に下山するという計画である。3連休の混む前に登って降りてしまう山行である。向うは飛騨沢側から登るのが午前中で、山頂は昼前に到着して南岳経由で下山するとこと。上高地側からの私はどう走って登っても8時間はかかり、山頂の肩の小屋付近でのすれ違いの時間差は4時間。間に合いそうもない。木曜日は、昼に会議があるので計画変更は不可能。携帯の電話番号を交換して「エールを送りあいましょう」ということになった。

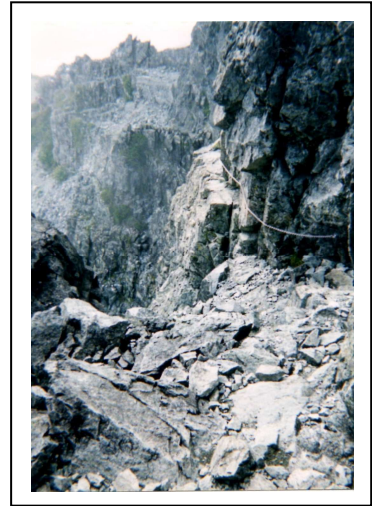
ということで槍ヶ岳すれ違い登山がスタートした。名古屋からは大阪発の中央線經由長野行きの夜行急行「ちくま」が便利で、名古屋発23時56分発で松本、4時14分着。新宿から急行アルプスの名古屋版です。松本で大糸線の白馬行きとクロスする。松本電鉄の4時42分の一番列車で新島々に行きバスで上高地・・・と予定を立てて松本電鉄のホームに降りて行ったところ、向かいの道から、「タクシー相乗りで上高地まで1人3千円にまけるよ。電車、バスと同じ値段だよ。1時間早く着くよ」呼び込まれ、相乗りメンバー4人が集まって夜明け前の上高地に向うこととなった。予定より40分早く5時40分に早曉の上高地に着いた。身ごしらえをして早めの朝飯を一口食べて、上高地の甘露な水に入れ替えて予定より1時間早い6時に上高地を出発となった。明神小屋06時40分、徳沢小屋07時20分と各1時間のコースタイムを上回る順調な散策登山だった。登りがほとんどない林道歩きに突如、眠気に襲われ夢遊病者のごとく歩きながらうつらうつら、ふらりふらり。ついに横尾小屋の丸太ベンチで08時20分まで20分の睡眠となった。普段の運動不足を後悔したが後祭り。つかの間の眠りで思いのほか回復した足取りで二ノ俣谷のつり橋を渡ると、いよいよ槍沢コースの登りに入る。樹林に囲まれた槍沢ロッジに9時45分着。百名山ツアーでは普通はここで1泊してゆっくり頂上を目指すとのこと。ここまで上高地の1500mから14.4km、標高差300m、少しは早いペースだが、ここからが本格的な登りとなる。

槍沢沿いの登山道は、ババ平のテン場においしい水があり、赤沢と白沢など右側からの小さな沢が流れ込みガレ場を何度も横切って上って行く。沢から高巻きで登って夏なら大きな雪渓が残るの大曲で左にカーブを切りながら水俣乗越への分岐(2094m)を越えると傾斜がきつくなる。カー

ルのようなU字谷で紅葉の走りで色づいた雄大な斜面を見ながら、つらい登りに一服の安らぎをもらう。2350m 付近の天狗原の分岐を 11 時 40 分に通過、景色をみる余裕はここまでだった。急に傾斜がきつくとつらい登りになった。メモによると「感想を書くに耐えないほど「疲れた」とのこと。こうなったら、ひたすら足を進めるしかない。殺生ヒュッテの山小屋も、大槍も、頂上小屋も視界の中に入って手に届きそうだが一向に近づかない。源流部を横切って見晴らしのよいモレーン台地で振り返ると槍沢の全景が素晴らしい。しばし疲れを忘れさせてくれた。播隆上人ゆかりの坊主岩を通過したがまだ遠い。2850m の殺生ヒュッテへの分岐であと標高差 250m。小屋直下のジグザグ道を折り返し先だけみて足を進める。白馬岳の時と同じで小屋が見えてから一層、傾斜がきつくなり足が出ない。14 時 30 分ついに 3100m の槍ヶ岳山荘に着いた。上高地から 8 時間半もよく登った。一休みのあと、3180m の槍の穂先まではハシゴが整備されており順番待ちなしで 10 分少し。15 時に山頂 (3180m) に立った。槍の穂先と想像していたほど狭くなく 山頂には二十人ほどがいた。快晴で立山・剣、後立山連峰に笠ヶ岳、穂高連峰、遠くに薬師岳と 360 度の眺望は素晴らしかった。陽が傾き、大槍の陰が源流の沢に大きく延びて風が冷たくなった。15 時 20 分後ろ髪を引かれながら頂上から下り小屋に戻る。小屋の前のベンチに座って登ってきた槍沢を眺め返しながらワインと山頂ビールで乾杯。17 時 30 分夕食後、笠が岳の山並みに沈む夕陽を見ながら、7, 8 年前に笠が岳からみた大槍の左にでたご来迎を重ねて見ていた。夜は泥のように眠った。

翌 21 日は 5 時起床。身支度して日の出を堪能。5 時 36 分に太陽は常念岳の山並みの左がわの稜線から顔をだした。登る朝日に輝く常念のゆったりとした大きな山体を眺めたが、「次は、鹿島槍か常念から夕焼けの中に浮かぶ槍の穂先を眺め返して見よう」と次なる計画が浮かんできた。小屋前で出発前の山頂コーヒブレイクを楽しんだ後、6 時 30 分余裕の出発。天気も快晴で疲労も回復していたので、そのまま飛騨沢に下る予定を変更してコースタイムで 3 時間ほど余計にかかる南岳から槍平小屋のコースを選択した。小屋から少し下り日本一高い峠である飛騨乗越 (3020m)、を越えから大喰岳 (3101m) の稜線は大きなアップダウンはなく 3000m のハイキング気分で槍ヶ岳を振り返りながら左に槍沢、梓川こしに常念から大天井の表銀座の山並みを見ながら南下、頂上直下で鎖場がある中岳 (3084m) を越えから天狗原の分岐をへて 3023m の南岳へと稜線散歩を楽しんだ。右前方に笠ヶ岳が大きな山塊として広がり、北穂の険しい岩稜が目の前に迫ってきた。稜線縦走を十二分に楽しみながら笠新道から登った笠ヶ岳の苦しかった登りや槍の穂先のシルエットからでた御来迎、気象デリバティブから仕事のこと、なんでここを歩いているのだろうか?・・・と様々の想念を抱きながら足を運んだ。予定より早く南岳を通過したので大キレットの眺望がよいシシバナのテラスで稜線散歩の終わりを惜しんでしばしの休息、30 分。残りのワインを飲み納めた。北穂の崖を降りる人、大キレットで難渋している 1 人、2 人・・・などなどを眺める。南岳から槍平小屋へは 99 年に開設された「西尾根新道」が素晴らしい眺望でお勧めコース。笠が岳を前景に北穂の滝谷の絶壁が間近にせまり素晴らしい眺望なれど足元は急な険しい下りで気が抜けない。最後に一気に急降下して槍平小屋に 10 時 35 分、一休み。新穂高ターミナルまでは意外に遠い。林道をトチの実を集めながらの下山。13 時 30 分着。深山荘の露天風呂で汗を流して、高山経由で 20 時 20 分名古屋着。うまいければ昼過ぎ槍の頂上で会えるかもしれないとの計画だったが、僅かの遅れてすれ違い登山となってしまった。残念。

北アルプス**劔岳**(46)は、このところよく利用する名古屋 2355 発の夜行『ちくま』(リクライニングのデラックス座席で意外に快適)で出発、松本から新宿発の急行「アルプス」に乗り換え大糸線、信濃大町でおり、扇沢からトロリーバスで、黒部ダムを越えて 0920 室堂ターミナル着。09 時 35 分室堂発、ミクリガ池、雷鳥沢を越えると雷鳥坂の本格的な登りとなり、別山乗越 2700m 11 時通過。山頂に最も近い山小屋、標高 2400m 劔山荘 12 時 10 分着。昼食休憩 20 分、12 時 30 分小屋に荷物を少し置いて、往復 5 時間として劔岳山頂の往復を強行。小屋からひと登りで稜線の一服の劔、2613m に着く。すこし下って武蔵のコル。ここからまずガレ場の稜線を登って前劔のピークに着く頂上山塊が目の前に聳え立つ。ここから頂上までが核心部で前劔から間もなくの初めてクサリが出てくる。しばらくは稜線歩きとなるが、平蔵の頭のすぐ前から頂上まで鎖場、危険な壁、ナイフリッジが連続する。まずクサリをにぎりながらトラバース、鎖で登り平蔵のコルから先は一方通行で登りはカニのタテバイの登り、50m の垂直の岩壁を三点保持でのぼり、15 時 05 分に標高 2999m の山頂に着く。午後の登りだったので下山組とまれに会うだけで、登りは誰もいない。夏なら大勢の登山者で特にツアーが多い日は順番待ちと喧騒のるつぼだが今回は静かな劔岳を満喫した。一気に登ったので少し緊張はしたがあまり危険さを感じなかったのが不思議。頂上には小さな祠がありは 360 度のぐるり視界。白馬岳から、薬師、裏銀座・・・の頭だけが一面の雲の上に突き出て幻想的。後ろ髪を引かれる想いで 15 時 15 分頂上をあとに。カニのヨコバイが最も危険だったが無事に通過、後は登りのコースを戻った。下山は夕刻になったので、結局誰にも会わず終い。あとで思ったがもし転落とか怪我でもしたら誰に目撃されなかったらと思うと少々、反省。17 時に劔山荘に戻る。山行を振り返りながら雲の上のコーヒープレイクとなった。9 月の静寂な山だった。翌朝、劔山荘を 6 時出発。**立山**(47)に向かった。立山連峰の別山 2880m の山頂、北の峰に戻って劔岳の眺望を楽しむ。真砂岳、富士折立、大汝山 (3015m)、雄山、(3003m) を縦走して、一の越から室堂に下山しミクリガ池温泉でひと汗流して (10 時 50 分)、室堂 11 時 45 分出発。予定より 1 時間早い。室堂からバス、ケーブルカー、富山電鉄で富山に。富山から高山経由で名古屋 20 時 36 分着。とにかく懸案のお盆山行は終わった。

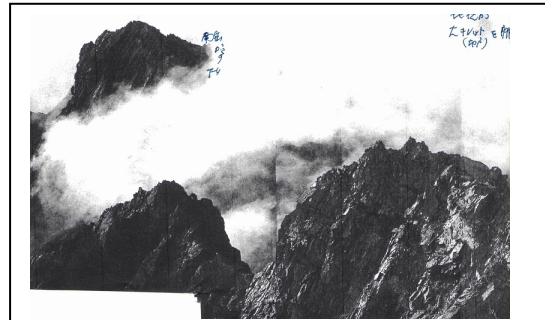


●**2003 年 (58 歳)**、東京、気象衛星センターへ転勤、数年前の気象衛星ひまわりの打ち上げ失敗後の衛星寿命が尽きて米国から借りた衛星で綱渡りをしてきた現状打破の気象衛星ひまわりの再打ち上げで忙殺された。

●**2004 年 (59 歳)**の特筆すべき山行、は夏休みの 7 月、山の会らんとんの足の揃ったメンバー 3 人で前夜登山中 2 泊丸 3 日で『最難関の北アルプス槍・穂高大縦走』を果たしたことである。途中の道の駅で 2 時間仮眠、新穂高ターミナル登山口を早朝出発で欲張って槍平小屋から左に折れて奥丸山に登って飛騨側から飛騨沢の向う槍ヶ岳とそれにつらなる山並みが見える絶好の眺望の良い稜線を廻って行くことにした。しかし眺望どころでなく前夜の睡眠不足もあいもって私を含めメンバー 2 人が不調となり、奥丸山、10 時と予定より遅れ、双六からくる稜線、西鎌尾

根のコル、千丈沢乗越からあと標高差 600m の苦しかったこと、鎚の最後の登りでへたり二人で登山道の脇でダウン、やっとのことで 9 時間と少しで槍ヶ岳頂上直下の山小屋に着いた。頂上ビールを飲みしばし爆睡。

2 日目、0630 小屋発、槍ヶ岳から日本一高い峠、飛騨乗越を通過し 3000m の稜線歩きで南岳へ。昨晚十分寝たので今日は快調、3000m 超の大喰岳、中岳と稜線歩きを楽しみいよいよ南岳 (3033m) につき (10 時) シシの鼻で大キレットを眺め気を引き締めた。大キレットに向かい、険しい岩壁を 300m 急下降。痩せ尾根、ピーク難所を越え大キレットの底を上天氣の幸運に助けら



北穂高岳から長谷川ピーク、大キレットを望む



ジャンダルムを登った後で一休み

れ無事通過、さらに難所が続く長谷川ピークを越え、飛騨泣きと続く難所を一つずつ越え、北穂のとりつきまで着いたときは本当にほっとした。足場の悪いガレ場をジグザグに急登、北穂高岳山頂直下の小屋に着いた (12 時、大休止)。以前、涸沢キャンプで北穂から奥穂を廻った時と同じコースで北穂から涸沢岳を抜けて奥穂岳山荘に縦走 (14 時着、泊まり)。ペースはコースタイムより早い。

3 日目、天気は良く、危険な難路が続く長丁場のため小屋 6 時出発。小屋前から長い梯子をよじ登り第 3 位の高峰、奥穂高岳 3190m の頂上の祠へ。北岳と同じ高さとなる 3 m ほど石を積んだケルンに祠がある。ここから西穂高岳までが本格的な難路。まず両側に千 m も落ち込むナイフリッジの馬の背を冷や汗をかきながら下降、その先の急峻な崖をクサリ、鎖でかなり険しく 3 点確保で慎重に下降、やっとロバの耳へ。登り返して岩塔のジャンダルム (裏側から登れる) の頂上へ。ここから奥穂高岳からのルート、岳沢から上高地など 360 度の絶景を眺める。さらに最難関の縦走路が続く、畳岩の尾根の頭を越え難所の天狗のコルから天狗の頭への難しい岩壁を登り、天狗の頭からは柱状節理の難しい逆層スラブの険しい岩壁を長い鎖を使い慎重に下降、さらにやせ尾根が間断なく続く。間ノ岳からさらに小さなピークが繰り返すし出てくる痩せ尾根が西穂高岳のピークまで続き一瞬の気の緩みも許されない。ピラミッドピークを越え独標まで来ればやっと一安心、西穂山荘からは疲労困憊のためロープウェイで新穂高ターミナルまで降りる。9 時間。温泉で疲れをいやしその日に東京へ戻る。今まで山行の中で一番の厳しい登山路で長い緊張を強いられる難しい山行となり、終わってみれば充実感あり、そして 3 人の息があった思いで深い 3 日となった。

『中央アルプス北部主脈縦走を計画し、空木岳から越百山 (コスモ) まで』の計画をたてて 8 月、早朝 3 時柏発で中央高速を飛ばし駒ヶ根 P に車をき、ロープウェイで千畳敷へ、極楽平から標高 2800m で稜線にでて南下。稜線から外れて三沢岳も行きたかったが先を急ぎパスして南下、槍尾岳 (2727m) を登り、少し下って槍尾岳避難小屋泊 (1415)。翌日、0515 小屋発、池の平カールの稜線を歩きながら南アルプスを遠望。熊沢岳 (2778m) から東川岳。ここから 300m の大下りで底の木曽殿乗越へ急下降、一休み (12 時)。小屋で水を補給して標高差 360 m を登り返し空木岳 (49) 2864m に。この先を進むも豪雨が予想されていたので南駒ヶ岳までの縦走は不可能と断念、空木岳登山口に近しい池山避難小屋で泊まり駒ヶ根へエスケイプ下山。

●2005 年 (60 歳) 5 山 (50) ～(54) : 定年退職後、気象予報士試験の責任者となり東京に在住。霧ヶ峰 (50) は 1 月末、冬期にメンバー 11 人で八島ガ原湿原をスノーシューで縦走。車山 (1925m) の富士山レーダーの代わりに新設されたレーダー前を通り湿原に降りたが不慣れな雪面で手間取り、八島ヶ原湿原まで行けず途中で左に折れて先を急いだ。素敵な山小屋として知られていたヒュッテジャビルに泊まったが、ご主人が元南極越冬隊の一員だった。

安曇野から眺めるとピラミッドの形状の特徴をもつ大きな山の姿の常念岳 (51) を残雪期 4 月末の連休にメンバー 11 人の大所帯で縦走した。この時期の 3000m 近い表銀座コースはひと度荒れると危険極まりないので余裕をもった山小屋泊の山行計画とした。前夜柏発で高速を飛ばし 0610、標高 1400m の中房温泉登山口から登る。三大急登の一つといわれている合戦尾根はきつい登り、第 2 ベンチ、合戦沢の頭で休み 1105 稜線、山小屋燕山荘に着く。予想外に雪が少なく難なく稜線まで進めた。前夜発なのでここで余裕の泊まり、翌朝 4 時出発で燕岳往復、夜明けと御来光を望む。残雪にすっぽり覆われておりピッケル片手にツボ足で往復 1 時間半。小屋を 7 時出発、表銀座縦走コースを梓川越しに標高 2600m 付近から上だけ残雪に覆われている槍穂高連峰の山並みを眺めながら大天井岳を越えて常念小屋へ。大きなアップダウンもなく、ところどころ雪に覆われた縦走路は天気良し、穏やかでゆっくり景色を楽しみながら縦走して 14 時過ぎに常念小屋へ到着。早速、山並みを眺めながら穏やか春山を小屋の前のテラスで酒を酌み交わしながらのゆったりとした至福の時を夕刻まで過ごし満喫した。皆の笑顔が物語っていた。翌日、小屋を 0530 出発し常念岳 (2857m) に登り安曇野側に林道まで下山。

鹿島槍ヶ岳 (52) は新宿発の夜行バスで扇沢へ (0515)。0545 登山口発、柏原新道を稜線に向かう、0915 種池山荘、2670m の爺が岳を通過、赤岩尾根からの合流する乗越まで 300m の下り、冷池山荘で 1130 一休み。稜線歩きで布引岳を通り双耳峰の鹿島槍ヶ岳の南峰 (2889m) 頂上に (1315)。天候悪化の予想なので難関八峰キキレットは諦めた。せめて北峰まで行きたい思いだったが陰しい稜線がガスの中で危険と判断、目前で引き返す。冷池山荘に戻り 1440 戻り頂上生ビールを飲む。美味だったこと。翌日、同じルートで下山、夜、新宿に戻る。

南アルプスの奥深い 3141m の塩見岳 (53) は 9 月はじめ柏夜発で高速を飛ばし途中、中央道原 S A で 1 時間ほど仮眠、松川 I C から南アルプスを奥深く林道に分け入り、鳥倉林道ゲート (1650m) 0745 発。メンバーは 12 人、男性 3 人、女性 9 人で女性パワーに押され気味。塩川小屋からのルートが合流する三伏峠 1130、睡眠不足でダウン、長めの休憩をする。塩見岳が見える長い稜線を 3 時間、1515、歩程 8 時間近くで塩見頂上小屋に着く。今日はここで泊まる。結構混んでいた。4 時起きして頂上へ。眼下に荒川三山への縦走が見え、その先に悪沢岳、赤石岳がどっしりと構えていた。頂上発 0550、同じ道を 8 時間かけて下山し、林道、高速で柏に 21 時戻り、17 時間かかる強行日程だった。

鳳凰三山 (54) 10 月下旬、新宿から最終の夜行で 0230 甲府着。夜叉神峠行きのバス待ちで駅前ベンチでの仮眠。4 時発の臨時バスで夜叉神峠へ。夜明け前の暗い登山口を 0530 出発、2582m の苺平まで北岳を左に眺めながら長い長ゆっくりした登り。ひたすら歩いた。さらに南御室小屋を通過し少ししっかりした稜線を歩き強風に吹かれながら薬師岳小屋に 14 時過ぎに着く (小屋泊)。翌朝 5 時発、この季節、この高度で気温は零度近く積雪はあったがかなり寒く足元には十分注意しながら薬師岳 (2780m) に登り、観音岳 (2840m) を通過し薬師岳、オリベスクがそびえる甲斐駒ヶ岳の頂上と同じ白い岩石で覆われた地藏岳 (2764m) に登った。賽ノ河原には信心深い

地元の人がお礼のために運び上げたお地藏様が無数に並んでいて総観。鳳凰小屋を越えドンドコ沢をひたすら下り青木鉱泉に下山（1430）、温泉に浸かり鳳凰三山の山旅を振り返った。バスで葦山にて、南アルプス北部、八ヶ岳を見ながらJRで新宿に戻った。

●2006年（61歳）5山（55）～（59）： 赤城山（55）はJR東十条0618で前橋0830、赤城バスでビジターセンターへ。1035出発。駒ヶ岳から主峰黒檜山（1828m）、地藏岳など赤城大沼を囲む含みグルリ一周の山々をめぐる。5時間。日帰り。20時戻り。

残雪を抱く朝日連峰の峰々、古寺鉱泉から小朝日岳を越え大朝日岳（56）を10時間の往復で登った。標高1840mなれど急いでも往復10時間は遠かったのが実感。カタクリが咲く稜線、残雪の飯豊連峰など大パノラマの眺めが圧巻。

★大朝日岳は遠かった・・・・・・・・・・朝日連峰山行（2006年6月10日 - 11日）

稜線に出て古寺山から眺めた残雪を抱く朝日連峰、大朝日岳に連なる峰々は素晴らしい一語に尽きると同時に、その距離を往復できるかという不安も抱いた。前日の山麓の秘湯、古寺鉱泉に泊まり、温泉と山菜とアルコールを満喫（他に泊まり客なし）して快眠、メンバーの一人の山形在住の知人と合流、大朝日往復の長丁場なので4時ちょうどに小屋前出発とした。残雪の沢をトラバースし6月の東北の爽やかなブナ林の中をジグザクに登り、一服清水の冷たい雪解け水でノドをうるおしながらの急登を快調な（私を除いて）足取りでの登りだった。ハードな山行は半年ぶりになるので皆さんの足を引っ張らないように、30分経過、1時間経過、・・・とつぶやきながらの登りだったが、週末ごとの荒川遡行25km歩きの成果が現われ、どうやら落伍だけは免れた。



豊富な残雪の斜面を登りきって雪の稜線歩きをへておよそ3時間で古寺山に着く。360度の景色で小朝日岳から大朝日岳、さらに北に伸びる稜線の先に以東岳まで見渡せる山々には残雪と緑の木々が調和していた。景色はよかったが遠望の大朝日岳までの稜線には、小朝日の登り下りが控えており、はるか向こうに見えた大朝日の往復できるか心配だった。小朝日まで勢いで昇ったが、コルまで200mくらいの結構な下りで少々帰りが心配となった。登山道の両側には今を盛りといった具合にカタクリの群落が延々と続き疲れを癒してくれた。最後の銀冷水の雪の斜面はかなりの急登でアイスパーン化しておりアイゼンをきかせての慎重に登ったが、春山気分での周りの景色を楽しみながら気持ちよい登りとなった。出発して6時間、大朝日小屋にやっと到着して一休みというのが普通だが、当会の若手の快足グループが「頂上まで行って休みましょう」と小屋を素通り、10時15分、念願の大朝日岳の山頂に到着。足が揃って休みも最小限ということで予定より1時間以上早いハイペースだった。

大朝日の頂上からのパノラマは最高だった。朝日連峰の奥深い山々、飯豊の山々、月山・・・と登った山、まだ登ってない山が視野の中に踊っていた。帰りは、懸念していた小朝日の登り返しも思っていたほどではなく一安心したが、その勢いで古寺山から下りの雪稜を右に折れて雪の斜面を下るところを誤って、どんどん下ってしまった。雪面に踏み跡が多数ついていたので、その気になってしまったが、地形図と磁石で誤りを発見、登り直して30分のロスですんだ。冬の季節や視界不良だったら大変だったと反省しきり。というハプニングもあったが、快足の下りで出発から10時間で古寺鉱泉に戻った。ハードだったが、はるか向こうに見えた飯豊連峰に思いを

はせながら、朝日連峰の雄大さ奥深さに触れることができた。メンバー野皆さんに感謝。

会津駒ヶ岳(57)は、尾瀬行きの東武の夜行で会津高原へ。4時発のバスで檜枝岐登山口(0510)、2003mの頂上(0845)はガスで楽しみにした湿原でも視界なく6時間で往復。駒の湯の温泉でゆっくり浸かり早めに浅草に戻る。

四阿(あずまや)山(58)は早朝発 0530 柏発、高速で菅平高原、ダボス牧場へ。山仲間 10 人でダボスを横切り根子岳頂上へ。緩やかな草原のような登山路、最後が少々きつい登りで双耳蜂の四阿山(2354m)の頂上。6時間で花の百名山のひとつを周遊。

草津白根山(59)は JR で高崎、草津温泉下車でバスで白根火山へ。エメラルドグリーンの湯釜を見て本白根山の 2150m のピーク(2171 m)(最高点は活火山で入山禁止)を踏んで(1220)万座温泉に下山。1315。途中、鏡池を遠望、最近この池付近を中心に火山噴火が発生し死者がでるなど活火山の典型的な山となった。

●**2007 年(62 歳)**(60)～(70)11 山： 初夏の快晴清涼の**浅間山**(60)は東十条 0636、早朝発新幹線で佐久平、バスで車坂峠(0950)へ。まず外輪山のトミーの頭(1100)にのぼり、そこから下り浅間本山の草滑りからガレ場を登り、浅間山本山の頂上火口のお鉢へ(1230、2568mの頂上は入山禁止)。浅間本山のお鉢は大噴火のあと小噴火が度々あり斜面は真っ黒な火山礫歴でザクザクの登山道となっていた。お鉢からの下山後再び外輪山の蛇骨山、黒班山(2404mの暫定頂上)、を登り返し来た道を戻り峠に戻る(1505)。標高 2000m 近い高峰温泉で小諸を眺めながら汗を流して小諸に戻り、高速バス新宿に戻る日帰り登山となった。

岩手山(61)は 6 月、4 時起床で大宮へ。JR 大人の休日倶楽部の新幹線フリーきっぷ 3 日間利用、一番列車で盛岡へ、網羅温泉コース(1030)でリフト終点から長い縦走路。残雪、アップダウンも多く、不動平から頂上(2038m)15 時。戻りは鬼ヶ城コースで長い稜線歩き、少し計算違いで 7 時間半を超え、途中から走ったが最終リフト 17 時に間に合わず、さらに 1 時間かけてリフト横の登山路を走って下山、網羅温泉の車に戻って盛岡に戻りビジネスホテル泊。

翌日、盛岡から新幹線の一番列車で福島乗換、米沢へ。天元台までバス 40 分。**西吾妻山**(62)は北展望台から眺望の良い人形岩、2005m の梵天岩、を巡り頂上らしからぬ頂上(2035m、展望なし、1105)。見晴らしよい天狗岩からカモシカ展望台。秘湯、新高湯温泉へ下山、1415、汗を流して米沢へ。その日に大宮に戻る。

日光白根山(63)は尾瀬行き夜行バスを利用して深夜 3 時に日光行きの一番バスに乗り継ぐため鎌田で途中下車。仮眠予定のバス待合所が閉鎖中、ホームレス状態で仮眠場所探し苦勞。結局、ベンチを見つけ仮眠。7 時の一番バスに乗り換え丸沼登山口(0725)からは林の中を登り天空の湯に登り足湯をしながら素晴らしい景観をみる(0815)。主峰奥白根山(2578m)の大きな岩の上の頂きを踏む。美しいエメラルドクリーンの五色沼を見ながら前白根山(1200)を通り日光湯元に下山。前回、日光二荒山神社でテント泊して金精峠から登ったが途中ミズレまじりの雨と寒さで撤退を余儀なくされた 8 年前の山行のリベンジに成功。

武尊(ほたか)山(64)は北アルプスの穂高に対して上州武尊と呼ばれており、日本武尊のゆかりのある山岳信仰の山である。7 月 28 日の真夏、早朝発日帰りで上越線沼田から登山口の武尊牧場(0945)へ。シラビソ林の尾根から高山平の湿原、3 段の鎖場を越え、中ノ岳を巻いて菩薩の清水の冷たい水を飲んで最後の急登 30 分で大展望の上州武尊(沖武尊、2158m)に(1245)着く。頂上からは尾瀬の燧岳、至仏岳、平ガ岳、谷川岳、皇海山、苗場山がぐるりと眺望、6 時

間で往復。下山中、一時、急な前に見舞われる。暑かったので下山後ビールのおいしさを満喫。

美ヶ原(65)は8月、青春18キップを使ってJR中央本線新宿2355発のムーンライト信州で乗り継ぎ松本へ。バスで三城の登山口へ。百曲がりの林間コースの登山路を標高差600mで標高2000mの美ヶ原高原へ出る。後は高原の旅歩きで最高点王ガ頭(2034m)は平坦で牧場の世界、のんびりと周遊しここまで車道があるので観光客で賑わうバスターミナルまで周遊コースで5時間、松本に戻る途中、浅間温泉でひと風呂。また残りの18きっぷで乗りついで新宿に戻る。

新潟県の頸城山塊の**火打山**(66)と**妙高山**(67)を合わせて山中1泊、大人の休日倶楽部利用で登った。9月の静かな山歩きを目指して大宮から長野新幹線の一番列車で長野へ、信越線に乗り換え妙高高原駅、バスで笹ヶ峰登山口(1300m)へ。登山口1010発、黒沢の水場のあと12曲がりの尾根を急登、雲見平から湿原の中に立つ三角屋根の高谷池ヒュッテへ(1320)。ここから火打岳が見えるはずだったが残念ながら天気悪く見えずじまい。ひと休みしてさらに火打山(2462m)ピストン2時間で往復、頂上ではガスで視界なし、佐渡ガ島見えることを期待したが残念。16時ヒュッテに戻る。素泊まりで夕食を作る。翌朝5時半出発、薄暗い沢筋を峠まで登る。視界が開け、湿原に黒沢池ヒュッテが朝霧の中に眺められた。大倉乗越で正面に妙高山(2454m)を眺め一旦大きく下って登り返しの急登がきつい。天気快晴で頂上からの眺め360度で素晴らしい。燕温泉へ下山。温泉で汗を流そうとしていた時、兄の容態悪化の緊急連絡受け急いでタクシーで妙高高原、新幹線で大宮、浦和に戻り間に合った。「山小屋で携帯への連絡がつかず、あちこち山小屋通話したが連絡がとれず大変だった」と後で家族からきついお叱りを受けた。

五竜岳(68)は唐松岳から縦走をした。新宿からムーンライト信州(青春18きっぷ)で松本、大糸線に乗り換え白馬で下車。八方尾根のリフト上のケルン(0810)からの白馬岳、白馬鎧ヶ岳に連なる白馬三山の険しい山の峰々を眺めながら尾根を登り稜線に立つ唐松小屋へ(1055)、ここから唐松岳(2814m)山頂ピストン。引き返して五竜岳に向かって黒部川の深い谷越しに雲海の上に浮かんだ立山連峰、剣岳を眺めながら稜線を縦走南下し五竜岳山荘1450着、五竜岳を往復して17時小屋着(泊)。翌日0430発。長大な遠見尾根を登って来た稜線を見ながらの下山、神城から大糸線、信越線で新宿に戻る。



戸隠連峰の最高峰、**高妻山**(69)は11月の始め、メンバー11人で柏早朝0530発。高速を飛ばし、長野県上信越道の信濃町ICで降りて二百名山の1917mの飯綱山を登り戸隠キャンプ場15時。テント泊。キャンプファイヤーを取り囲み長い夕餉の宴を楽しんだ。早朝はテントの外は0℃近く寒い。06時で出発、不動の滝付近で鎖場もあり結構な登りで不動小屋1200着。稜線を五地藏山1998mに向けての登り、最後は八丁ダルミからまっすぐ急な登りで山頂(2353m)に着く(1045)。すでに頂上付近が冠雪した白馬岳や妙高・火打が雲上に見える。9時間45分で往復。山までが遠く、柏への戻りは23時と遅くなった。良い山だが途中視界があまりよくなかったのが残念。

天城山(70)は望年山行で天城高原から万二郎岳、万三郎岳(1406m)と巡る18人の4時間の伊豆半島の冬でも常緑の山巡り。

●**2008年(63歳)** 10山(71)～(80): **八甲田山**(71)は6月、北東北の白神山地山行の途中で登る。夜行で常磐道、東北自動車道で青森県酸ヶ湯温泉登山口まで8時間、雨降り視界なしの

ガレ場、階段登りで大岳（1584m）、毛無岱の湿原をめぐり 5 時間で 1 周。下山後残念ながら酸ヶ湯温泉に入れず先を急ぎ白神山登山口へ。翌日縄文時代の温暖化で北進した見渡す限りのブナの本林を抜けて自然遺産白神山地ピストン後十二湖巡りでブナの巨木が林立した原生林を堪能。

焼岳 (72) は 6 月、夜行バスで上高地へ（0600）、梓川沿いにカラマツの樹林帯を抜け活火山のゴツゴツした岩稜を抜け旧中尾峠コースから活火山の頂上（2455m）を踏む（3 時間半）。頂上でゆっくり笠が岳や穂高連峰を眺望。中の湯へ下るが道悪く難渋下山（1220）、秘湯、中の湯温泉で山を見ながらゆっくりと湯につかった。60 歳の年、春 4 月急に思い立って上高地に向かった。まだ雪で閉ざさ交通機関はなく-釜トンネルを抜けて雪道を上高地に向かった。だれとも会わず雪道を歩いて静寂を楽しんだ。あの夏のにぎわいがうそのようで吹雪の中、大正池を越え上高地のターミナルに着いたが冬景色の寂寥のなかでたどり着いたが上高地はから雪の間に見えた穂高だった。帰路、旧安房峠のトンネルの手前のり中の湯のバス停から登り中の湯温泉の一軒宿に泊まった。この時以来の中の湯だった。

八幡平 (73) は、6 月下旬、函館に用事があり東北新幹線を盛岡で降りバスで八幡平に向かい見返り峠から平坦な山頂（1614m）を巡り、藤七温泉でひと風呂、バスで盛岡戻った。バスが長かっただけで百名山らしからぬ山だった。

甲斐駒ヶ岳と一緒に登る計画だったが記録的な豪雨に見舞われ撤退した**仙丈ヶ岳** (74) はリベンジで 7 月、新宿発の高速バスで今度は飯田側の山麓の戸台から北沢峠にスーパー林道をバスで登り長衛荘泊。翌朝、長丁場なので 0350 まだ暗いなか出発した。登り始めて間もなく空が白み始め静寂の中の登りが清々しくやがて御来光を迎えた。シラビソの深い原生林のなかの登山路を味わいながら途中鹿殿遭遇に驚きながら登り小仙丈ヶ岳までで急な登りの後、暫く稜線歩きで最後は急登で、3033m の山頂（0745）まで 4 時間余。眼下に大きなカールが見える。快晴で眼前に甲斐駒、中央アルプス、北アルプスの峰々、塩見岳と素晴らしい眺望で去りがたく頂上に 1 時間も滞在。名残りを惜しむも下山開始、仙丈小屋でひと休みして美味のコーヒーを楽しむ。途中、まだ残雪のところもあり 5 合目で往路と合流して 1145 北沢峠、往路を戻り北沢峠から下り高速バスでその日のうちに新宿へ。

男体山 (75) は 7 月、浅草 0620 の特急で東武日光へ、バスで中禅寺湖岸の二荒山神社登山口へ。ここで入山料のお札を買い 0935 発。一直線の登山道を脇目もふらず急登、ガレ場の急登で足元が不安定、振り返ると中禅寺湖が眼下に広がる。標高差 1200m の神社奥宮の山頂（2486m）へは 3 時間。下山後中禅寺湖温泉につかり、その日遅く浅草に戻る。

鷲羽岳 (76) は 9 月下旬、水晶岳（黒岳）ピストンを狙う山中 2 泊の計画で新宿からの夜行バス終点の新穂高ターミナル 6 時出発。左俣谷を遡行、笠が岳登山口、ワサビ平小屋を抜け小池新道に取りつく。秩父沢を横切って進むとようやく急登がはじまり、急登の先、2300m の鏡平に着く（11120）、ここは風がない日には水面に逆さ槍ヶ岳が映る、絶好の展望スポットだが残念ながらガスで見えずしまい。わずかに雲間の上にてた槍の穂先を遠望できただけだった。さらに弓折岳で右に折れて稜線歩き。登山口からの標高差 1600m の、双六小屋に着く。笠が岳の稜線、槍ヶ岳の西鎌尾根、鷲羽、水晶に向かう稜線の交点で鷲羽岳が眼の前に大きく聳えているコルに山小屋がたっていた。ここまでは計画より早く 8 時間半。2 日目、水晶岳まで行く予定なので 0545 発、三俣蓮華岳を通り 1110 鷲羽岳山頂（2924m）まで登ったところでさらに風雨が強まり、ここから水晶岳往復して双六小屋に戻るのは、この風雨のなかでは危険と判断、鷲羽岳で十分と納得してコルにある三俣山荘に撤退。ここで泊まる。3 日目、ここから出発点の新穂高ターミナルまで戻

りその日に新宿に戻るため距離が長く長丁場が予想されるので小屋(高度 2550m)を 5 時に出発した。鏡平を経て長い下り 8 時間半。新穂高ターミナルに戻り、平湯で湯につかり飛騨高山発平湯経由のバスで新宿へ戻る。また水晶岳を逃してしまった。

尾瀬の「燧岳」(77) は紅葉の尾瀬を楽しむというテーマの山旅で、10 月始め 8 人パーティで今度は福島県側の檜枝岐廻りで尾瀬御池口から入った。1210 御池出発、裏燧林道で向かう。結構なアップダウンでシッポ沢の、三条の滝を見て 1510 温泉小屋から 1630 下田代十字路の第 2 長蔵小屋(1415m)。小屋前のテラスで御苦労さん会。尾瀬ヶ原をめぐり下田代十字路で長蔵小屋泊、翌朝 0430 起床、0625 小屋発、尾瀬沼の景色を満喫を見ながらブナの黄葉した樹林帯を抜け、沢筋の一本道を一直線に急登する。眼下に尾瀬沼が広がり 1015 燧岳頂上(2356m)に着く。1025 俎ぐら 2346m。ガレ場を下り燧岳を背景に草紅葉のじゅうたんが美しい熊沢田代を横切り御池に 1308。尾瀬は何度も行ったがこの尾瀬沼、燧岳のコースのこの季節は味わい深い山旅だった。

中央アルプスの最南端の「恵那山」(78) は 10 月、中央高速道夜行で岐阜に近い中津川 I C から林道に分け入り、黒井沢コースで登り爽やかな紅葉登山で山頂(2191m)を踏むに。途中視界があまりなかったが快晴で南アルプスの大観望が素晴らしい。

中国地方の百名山で一山のみ「大山」(79) は 11 月下旬神戸で同期会が開催されたので夜行の寝台特急瀬戸で米子に向かい、バスで大山寺口登山口へ。登り 3 時間での頂上弥山(1729m)を踏む。晩秋の季節の日本海側の山のため途中雪あり、下りは大崩壊を横切り下り宿坊がある杉並木の参道を抜ける。途中、古代のような奥の宮神社を参拝、古事記のような世界に触れた想い。

「苗場山」(80) は 11 月下旬、JR で越後湯沢から、祓川コースをたどる。0920 登山口、和田小屋(1300m)からスキー場のグレンデの脇から登り始める。頂上台地への急峻な登りは雪で滑り難渋、1305、頂上台地は広大な湿原で草紅葉が広がり多くの池塘群を抱く神の湿原を期待して登ったが予想外の深雪で真っ白の世界で残念な想いで頂上(2145m) らしからぬ頂上を踏んだ。正面にどっしりとした荒船山、谷川連峰の眺望が良い。往復 7 時間で日帰りした。

●「2009 年 (64 歳)」15 山 (81)～(95) : この年の秋で気象予報士試験の仕事に終止符を打って札幌に戻ることにしたため、東京にいる間で出来るだけ登ろうと残る 100 名山踏破の目標を立てた。この年「札幌やまびこ山友会」に入会した

山の名の響きがよい「皇海山」(81) は「すかい山」と響きのよい呼び名の山名で山岳仏教の修験者の山、北関東を山深く走る溪谷美で有名な「わたらせ溪谷鉄道」で奥深く入り足尾銅山の手前をさらに奥の進むと庚申山がある。ここからからの長いアップダウンのコースが長く難しい山路もよくなく百名山では登りにくい山の一つだった。以前、途中の庚申山まで登って引返したがお庚申山荘からのコースは無理だと諦め、今回は新緑の 5 月、群馬県側の沼田側から悪路であるが長い栗原川林道コースが開発されたのでこちらを選択することとした。5 月の新緑の季節、標高 1350m の皇海橋から不動沢沿いに往復 7 時間、眺望あまりよくなく孤峰の頂上が 2144m の標高。

「大台ガ原」(82) は 23 時、新宿発の夜行バスで 8 時間の長旅で奈良桜井市へ、大和上市から吉野口、そして吉野からのバスで大台ガ原登山口へ(1010)。梅雨の時期の 6 月始めの大雨の中で日の出岳(1625m、1130)から大蛇ぐらめぐりで濡れそびれながら 5 時間半。下山後大和八木に戻りレンタカー借り洞川で民宿に素泊まり。翌日の「大峰山」(83) は洞川から七曲がりカーブの連続の細道をヒヤヒヤ運転で 1 時間かかる行者往還トンネル入口から登り始める(0555)。急登で奥駆け道への峠(0700)へ。さすが日本で 1、2 を争う多雨地帯で雨の連続、吉野の修験道の道、奥駆け

道の稜線に出て南下する。日本で有数な多雨の山々で雨に濡れたシロバナバナヤシオつつじのトンネルに幽玄な風情を感じながら先を急ぎ、最後ひと登りで近畿の最高峰八経ガ岳(1915m)の頂上を踏んだ(0925)。稜線は鹿の食害で枯れ木が林立、往路をそのまま戻る。歩程6時間で往路を引き返す。洞川温泉で汗を流し奈良に戻り近鉄で名古屋に、新幹線で東京戻り自宅に20時

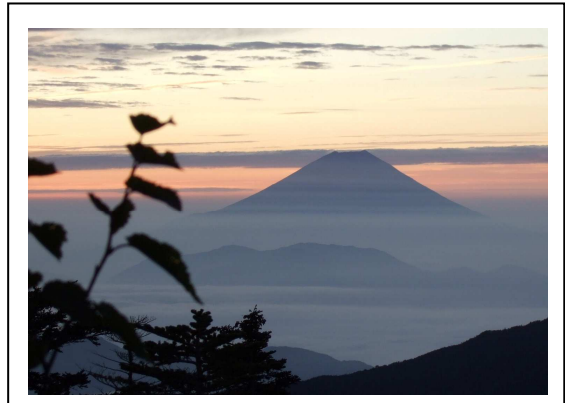
御嶽山(84)は、6月末梅雨時だったが南アルプス光岳を計画して塩尻で格安レンタカーを借りて聖岳登山口の近くの易老渡登山口に向かう遠山川林道を奥深く入ったが、途中で梅雨期の豪雨となり過去何度も林道崩壊が頻発していたため、帰れない可能性濃厚と判断し中止。林道を飯田市まで引返し、ぐるりと回って中央アルプスをトンネルで越えて中津川の谷筋を木曽福島に向かい御嶽山に計画変更した。ロープウェー終点10時、7合目から登り始める。さすが3000mの山、登山路に残雪多く視界は良くなり登山者は少ない。頂上近く山小屋が半分雪に埋もれていた。標高差1000m登り3時間半、剣が峰神社の鳥居から剣が峰(3067m)。視界悪くすぐに下山。後に2014年の火山噴火で剣が峰は登山禁止となる。頂上火口は広大で旧噴火口も多く木曽側の頂上は登山可能。塩尻に戻り、その日遅く新宿に戻る。

乗鞍岳(85)は前夜新宿発、新島々でバス乗り継ぎで乗鞍畳平へ。1時間半で頂上(3026m)、視界良く穂高連峰、南アルプスの眺めが素晴らしい。

7月、川入登山口から三国岳を飯豊連峰の稜線、1800mの付近切合屋へ8時間。途中豪雨でずぶ濡れ。翌日、カイヤギ小屋に向けて縦走開始したが雨と**飯豊本山**((86)2105m)で引き返す。切り合い小屋2泊して地蔵岳コースで下山。雨で登山道ぐちゃぐちゃ。**岩木山**(87)は飯豊山の帰りで山形ー秋田ー津軽と乗り継ぎ岳温泉へ、札幌に戻るため時間なくバスでスカイラインを登り、そこから頂上(1625m)へ。往復2時間。以前の登った白神山地が間近に見えた。

9月はじめ、東京での5年間の気象予報士試験の責任者という仕事から解放され札幌に戻る帰り道に大井川上流の樫島を起点に**荒川三山(悪沢岳)**(88)と南アルプスの盟主**赤石岳**(89)を一周

した。東京からJRで静岡、金谷で大井川鉄道に乗り換え千頭からトロコ電車井川へ。地元の小人数が乗車できるコミュニティバスが空いたので載せて貰い大井川の一番奥の温泉、白樺荘へ(泊)。翌朝、30分歩いて畑薙第一ダムへ。ここから東海フォレストのバスで(樫島で泊まれば無料)樫島登山口(1123m)。0930発で清水平で休み、湧水が美味でおいにぎりおいしい(13時)。尾根道で林の中を登っている途中で雨となり、一時雷雨に見舞われ少々不安だったがやがて遠のきひと安心。2413mの駒鳥池は苔に覆われ深残の幽玄さ。この池を通過すると小屋も近い。1630千枚小屋(2600m)まで登りが続く。2日目、今日は3000mの峰々を越える長丁場なので5時小屋発1時間の登りで千枚岳頂上へ。ここからが富士山から南アルプス北部の白峰三山の北岳、農鳥岳が大眺望でき、これから巡る荒川三山の山々がどっしりと構えていた。稜線をさらに丸山を通過すると赤石岳まで視界を妨げるものない眺望を丸一日かけて飽きることなく3000mの天空のプロモナードで満喫させてくれた。



槍ヶ岳に次いで6番目に高さの**悪沢岳(東岳)**、3141m、0730)から荒川岳、中岳と続く荒川三山は南アルプス特有のゆったりとした山塊でハイマツやお花畑(時期遅れで少なかったが)とガレ場の白の織りなすコントラストが美しい。中岳から400mほどを一気に下り荒川小屋でひと

槍ヶ岳に次いで6番目に高さの**悪沢岳(東岳)**、3141m、0730)から荒川岳、中岳と続く荒川三山は南アルプス特有のゆったりとした山塊でハイマツやお花畑(時期遅れで少なかったが)とガレ場の白の織りなすコントラストが美しい。中岳から400mほどを一気に下り荒川小屋でひと

休(1015)。スイカの切り見 300 円が雲上の味わいとしておいしく疲れを癒してくれた。赤石岳(3120m)に向かう稜線歩きは、北岳から塩見岳、一方で聖岳、光岳など南アルプスの最深部を見渡せる変化の富んだ山道で行く手に赤石岳がどっしり見える。大聖寺平のコルからの小赤石岳へは急な 300m の登りのぼりでしんどく 3000m の稜線をいくつかのコブを越え赤石岳山頂への分岐から**赤石岳**(3120m)をピストン。山頂は 500m 近く下がったコルの百間平らとその先に続く聖岳が大きく見える。分岐に戻り明日のため赤石小屋まで足を伸ばす。下りはアップダウンが多く、つらい下りでやっと赤石小屋についた(1600)。この日の歩程は 11 時間、とても疲れたが最も充実した 1 日となった。3 日目は先が長いので早朝 0545 小屋発、3 時間ひたすら下り樺島に下山、充実の荒川三山の山旅を終えた。シャワーを浴び往きと逆コースで 1130 畑薙第一ダムまで戻り、山で知りあった静岡在住の方の好意でありがたく乗せて貰った車で静岡駅まで車の旅。JR で東京、羽田に戻りその足で札幌に帰る。

さらに 10 月下旬、かねてから懸案であった九州・四国の山旅を結構、西日本の百名山の残り 6 山を一気に登った。その記録は以下の通り。・・・・・・・・・・・・・・・・

★九州、屋久島、四国の山旅

2009 年 10 月 19 日～30 日

定年後の仕事を終えて、懸案だった屋久島の宮の浦岳縦走に加えて九州、四国の山々を巡り、山麓のひなびた湯にする山旅を試みた。紅葉の盛りの季節の 10 月の下旬、初冬の北国札幌から千数百 km 離れた紅葉の季節の 12 日間の急ぎ旅だった。

★10 月 19 日《 札幌 - 鹿児島 - えびの高原(新湯温泉)

札幌を 19 日早朝に出発した時は 5℃、羽田、乗り継ぎで鹿児島空港に着陸した時には天気は快晴の 20℃を越えて半袖がちょうどよい季節だった。ANA 乗り継ぎなので荷物は千歳で渡して鹿児島受け取り、予約すみの格安のスカイレンタカーに積み込んで 13 時半、最初の山の霧島、韓国岳に向けて出発した。国道 223 号でえびの高原までおよそ 30 km、少し時間の余裕があったので遠回りをして霧島神宮にお参りして日本の発祥の地ともいわれている高千穂の古を巡った。国造りの神話の時代を感じながら韓国岳から高千穂の峰々を眺め、古代の道を抜けると今日の泊まり、霧島の山々の懷に包まれた秘湯、「新湯温泉、国民宿舎新萌荘」に着いた。新燃荘は新湯温泉の一軒宿、効能書きと新聞に紹介された記事によると皮膚病によく効くというのでリピーターの湯治の客で賑わっているとのことであった。「秘湯の宿 190」に選ばれているだけにひなびた温泉宿の露天風呂と湯治の湯船は少々熱めの湯と白濁した濃い目の湯が溢れていた。温泉好きの私としては、早速の湯船に通い快い時を過ごした。明日からの山歩きを考慮して、湯あたりをしないように今回は珍しく夕食前と就寝前の 2 回に留めた。

★2 日目(20 日)、《韓国岳 - 鹿児島 - 屋久島安房》

九州 2 日目を迎え、まだ暗い宿を朝食代わりに作って貰ったおにぎり弁当を抱えて早朝 6 時に**韓国岳**(90)に向けて出発した。6 時半、韓国岳登山口のえびの高原ビジターセンター前に車を止めて登山開始。真正面に韓国岳が聳え暁に染まる稜線の上は燃えるような色だった。駐車場の脇が登山口で県道沿い硫黄岳に向かう遊歩道に入り、火山特有の賽の河原の噴気を横に見ながら灌木帯に入り、急な登りをジグザク登り 5 合目の標識を見るところには眼下にえびの高原が広がった。典型的な火山湖である大浪池が眼下に見える 7 合目付近から西風の強風の吹き出しとなり、高度 1500m の気温と合わせて予想外に体感温度をかなり寒く感じてきた。頂上に向かう御鉢周りの切り立った断崖沿いの道で風が一層強くなった。7 時 45 分、標高 1700m の頂上に立った。強風に

吹かれながらの頂上からの 360 度の眺望は素晴らしかった。正面には噴火活動が活発な新火口が切れ込む真新しい新萌岳が目前に迫り、ピラミッド型をした高千穂の峰が続く、南に目を転じると噴煙たなびく桜島が遠望され、北側には九州の脊梁山脈の山々が頭一つ雲の上に突き出していた。方向からしてこれから登る予定の祖母山の山々、阿蘇の山々だろうと心が躍った。せっかくなので下山は往路とは別の大浪池経由のルートをとった。ジグザクしながらも木道の階段が真っすぐ大浪池に伸びており、少し登り返して着いた展望台からの眺めは、紅葉に彩られた火口壁に囲まれ深い色を湛えていた火山湖が印象的だった。10 日ほどあとにこの下山道で家族とはぐれて頂上から道に迷った小学生が亡くなったとのニュースを聞いた。迷った道はこの大浪池に向かう木道の階段が続く一本道だったが道に迷って必死で降りていく途中で足を滑らせて落ちたらしい。この季節、あまり利用されておらず、私のときも下山中に登山者に会わなかった。南国の木々をくぐる変化に富んだ道を下山して 10 時過ぎに登山口に戻り、屋久島に向けて出発した。当初計画では鹿児島から屋久島に直行して九州本土に北上することにしていたが、10 月中旬から船便が冬ダイヤとなり予定した便が減便されてスケジュール変更を余儀なくされたからである。宿は早朝発と山中泊を考慮して民宿「花皐月」(ブログで有名ならしい)の素泊り 2 泊とした。まだ暗いうちの早朝発なので、荷物の一部を宿に預けることと行動食のおにぎり 2 食と依頼して早寝した。

★ 3 日目 (21 日)、《安房 - 荒川口 - 縄文杉 - 新高津小屋泊》

4 時 50 分起床、昨夜整理しておいた荷物を背負ってヘッドランプを頼りに暗闇の道を停留所に向かった。6 時半の日の出にはまだ間があり暗い海の上には明けの明星が輝いていた。5 時 45 分発の荒川登山口行きバスに乗って 6 時 30 分頃に標高 600m の登山口に着いた。登山口は縄文杉まで登るエコツアー客が次々と着く。その中で 150 人ほどの高校生が 15 人ほどのグループに別れてそれぞれに地元ガイド付着きで縄文杉を往復するというので出発前のワイワイと賑やかだった。登山口を後に小杉谷から大株歩道入口まで延々と続く森林軌道、いわゆるトロッコ線路歩きである。若さで突走る男子グループ群と前後して少々煩わしかったが、標高差 700m、往復 9 時間前後の縄文杉までの山登りに挑戦している姿を褒めながら我慢、我慢。木組みの木道の高架鉄橋や暗いトンネルを抜け淡々と線路歩きが続く。



途中、小杉谷集落跡が点々と散見されたが、30 数年前まで 50 年続いた屋久杉伐採の最前線の集落が鬱蒼とした木々のなかに埋もれて歴史のなかで消えてしまっていた。軌道を分離する手動の切り替え機が錆びだらけながらも線路わきで健在なのを見て何かほっとした気分となる。島では樹齢 100 年未満の杉を地杉、1000 年未満を小杉、それ以上を屋久杉と呼んでいるとのことで、小杉谷を進むと軌道の周囲には次第に屋久杉の大きな伐採株が目立つようになってきた。1 時間少しで白谷雲谷峡からの合流する点標高 727m の楠分かれとなり、樹齢 1200 年といわれる孫の代が茂る「三大杉」を過ぎると「仁王杉」のまさに巨木といえる立派な木が出迎えてくれ、やや歩くと軌道が終わる標高 910m の大株歩道入口に着く。水場と最後のトイレがあり一休みするのに最適である。ここでまともな朝食としてオニギリ弁当を開き、余分な水をザックに積まないように飲み溜めをした。

ここからが本格的な石段の山道の急登となる。無人の避難小屋泊りなのでボンベ、コンロ、コッヘル、寝袋、食糧などを詰め込んだザックを担いでの登りで重く感じる。屋久島らしく水が豊

富で小屋の近くに水場があるので大いに助かる。急に原生林らしくなり急登で30分ほど汗をかくと、こぶだらけの巨杉に小さな木々が寄生している「翁杉」に着き、間もなく幹回り13.8mの切り株のウイルソン杉にたどりつく。樹齢は推定2000年、巨大な株の中は空洞で六畳間くらいの広さの中に登山者が入って空を見上げることができる。見上げた空の形がハート型となるのは見る位置が決め手、確かにそう見えるから不思議である。このあたりからが世界遺産に指定されている「巨木の森」が続き幽玄な雰囲気が漂う。標高1000m～1300mに集中している巨木に囲まれた登りが続くが巨木慣れしてしまうほど次々に巨木が現れる。この付近で木々の間から宮之浦岳に続く扇岳が青空を背景に見え隠れしていた。30分ほどで「大王杉」に着く。私の感覚ではこの巨木が屋久杉としては最も品格があり最大のように思える。やがて喧騒が増すと突然、目前に縄文杉が現れる。標高1300m、まさにエコツアー終点で賑わう縄文杉が戸惑っているように見える。巨大なこの縄文杉は周囲16m、樹高30m、推定樹齢7200年とも3000年以上とも言われているが、世界の巨木であるレッドウッド（メタセコイヤ）の120mなどに比べて屋久杉の巨木は総じてかなり背が低い。台風常襲帯にある屋久島で台風の猛烈な風にさらされて、高く伸びられないからだろう。研究によると屋久杉の年輪の歪みから推定された日本で最も猛烈な強さの台風としては、仏教伝来の538年前後の時期に来襲した風速93.5mの台風と報告されているが定かではないが……。縄文杉を越えると登山路は私一人となり急に静寂そのものに戻った。一応、縄文杉の水場で水を補給して高塚小屋を通過して新高塚小屋に着いたのが13時30分。早すぎてまだ誰も泊まりの登山者はいない。時間が有り余るほどあったので小屋前のテラスでコンロを持ち出して、なけなしのワインやら夕食用のハムなど並べてコーヒーを沸かして、ゆっくり味わった。荷物を絞ったため民宿に残した食糧とアルコールに後悔したが、あと祭りだった。夕食に五目御飯のレトルトやら味噌汁などを食して17時にはシュラフにもぐり込んだ。秋の日はつるべ落とし、小屋には電気がないので16時すぎには薄暗くなり、一人登山にはやや寂しい状況となった。標高1430mの小屋の床は秋の季節とともに冷え冷えとしており、南国と楽観して持参した薄手のシュラフでは深夜の冷気は思いのほか寒く、急いで合羽を着込んで耐える有様だった。

★4日目(22日)、《新高津小屋 - 宮之浦岳 - 縦走 - 花之江》

宮之浦岳 (91) 19136m

4時30分に起床し新高津小屋を4時30分に起床して5時出発。外はまだ真っ暗闇。ガスがでていて原生林の中をヘッドランプを頼りに登り続けた。小屋を出て急な登りが一時続き、それを過ぎるとやや緩やかとなった。もちろんこの時刻に歩いているのは私一人、原生林の中にトンネルのように続く登山道に霧粒を映し出すヘッドランプの光芒の輪が幽玄境を演出してくれているようだ。突然、その中に二つの目玉が光って驚かされた。鹿だった。何度も出会ううちに鹿の気配と特有な臭いがあることに気がついた。ランプを消して真っ暗にしてみたが、なかなかの雰囲気を味わえる。およそ1時間と少し、第2展望台の頃には夜明けが近くなったが、残念ながら濃いガスの中、坊主岩の奇岩が正面に浮かんで見えるだけだった。森林限界を超すあたりからガスが薄れきて、永田岳への分岐の焼野の三叉路付近になると、永田岳の奇岩が連なる山々が雲海の上に美しく聳えて見えてきた。8時15分、標高1936m、島を含む九州最高峰の宮之浦岳の山頂に着いた。登ってきた道が緩やかな山並みにトレースされた道が伸びており、その先に永田岳が雲の上に顔をだしていた。下界の雲海の上に山頂から南に向かう屋久島の背骨



のように花之江河に連なる翁岳、安房岳、黒味岳の山々が紅葉に彩られて伸びていた。再度ここに来れないだろうと思い、360度の眺望を味い尽くすとともにコーヒーを沸かしてユックリと山を味わった。残念ながら下界から立ち上る雲足は速く、1年に300日雨が降るという屋久島特有な雨の多さ速さに急きたてられ、長い縦走が故に先を急いだ。8時半頂上出発、雨に出会わないようにひたすら下山し続けた。

幸いなことに、このコースは扇岳をはじめほぼ稜線の西側を巻くように登山路がついており、アップダウンが少なく、2時間ほど下って投石の岩屋で一休み、観天望気で予想したとおりこの頃から弱い雨が降り始めた。朝暗いうちに小屋を早出の効能がきいて、まさに頂上付近で天気に恵まれた幸運を得た。黒味岳を借景とした湿原で有名だった花之江河を堪能する予定だったが残念ながらこの頃から雨が本降りとなった。13時に淀川小屋着、20分ほど雨を避けて休憩し再び下山。1380mの淀川登山口に下山したが、ここではトイレがあるだけで雨宿りするところもなく、期待したタクシーもなく落胆した思いだった。1日2便のバス便は14時39分発「紀元杉前」バス停発なので、間に合うように下山を急いだ。ほぼ予定どおり14時10分頃に着いたが、ここのバス停が一本立っているだけで雨宿りのするところもなく傘をさしてバスを待つしかなかった。始発のバスに乗り込んだのは私一人だった。安房に戻ったのが16時。明日朝の便が早いので、お土産を仕入れて宿に戻り、夕食は民宿指定の御食事処花皐月で登頂ビールと豪華料理で名残りの晩餐とした。小屋の寒さに疲労かはたまた雨に当たって冷えたか、食当たりか食べ過ぎか？夜、惨憺たる食当たりで屋久島最後の夜を苦しんだおまけまでついた。

★5日目（23日）《屋久島安房港 - 鹿児島 - 阿蘇山麓（地獄温泉）》

屋久島、安房港7時発の一番船での出発だった。まだ本調子には程遠い体調で6時起床、前日、民宿から借りた車で港まで来た（鍵を車内に残して）。体調不良で高速船ということで心配したが、2時間半の船旅を経て鹿児島港に無事着いた。今日は阿蘇山山麓に向かう移動日だったのが幸いした。鹿児島埠頭高速ターミナルから高速バスに乗って益城熊本空港IC入口で降りて空港行きに乗り換え、14時には空港着。再びレンタカーを5日間の予定で借りた。明日までの2泊の宿は「秘湯の宿190」の一軒宿である阿蘇山麓、奥阿蘇の湯治宿、「地獄温泉清風荘」である。それも湯治で2泊して骨休めを試みた。空港から2時間、途中で地元の道の駅のような市場で地元産の柿を一山と食糧を購入して宿に急いだ。期待どおりの温泉で「ひなが一日湯めぐり」のごとく、白濁の泥湯の「すずめの湯」をはじめに仇討の湯（女性）透明な湯の男の露天風呂、元湯など湯治の湯めぐりには事欠かない。宿に着くなり入湯、夕食後、露天風呂で静かな湯に浸りながら星空を眺めた。

★6日目（24日）《地獄温泉 - 阿蘇山 - 地獄温泉

阿蘇山 (92) 1592m

朝出発阿蘇山に向けて出発。観光客が車で来ることができるも最も高い仙酔峡登山口を10時出発、砂千里浜のガレ場を横切り噴火口壁を登りの最高峰に向けて火口縁をグルリと半まわりした。火口から立ち上る白煙を火口底に見ながらお鉢を巡り高岳を踏んだ。稜線は風が強く元来た道をたどり戻った。

★7日目（25日(日)）《清風荘 - 尾平 - 祖母山 - 尾平》

祖母山 (93) 1757m

湯治で借りた炊事場着きの部屋の片づけをするために4時30分に起床、簡単な食事をしてまだ暗い5時半に宿を出た。祖母山の登山口のポピラーコースの神原ではなく最奥の尾平を目指して阿蘇のカルデラを半周して、長崎から大分に向けて九州を横断する国道57号を東に向かってひた走り、県境を越えて豊後竹田から南下した。あと18kmほどの標識がでてついには車のすれ違いに

難渋する一車線の細道となってしまった。祖母山と九州の名峰の傾山と間の谷間を縫って旧尾平鉾山跡に着いたのが8時15分。本日の宿の「ほしこが in 尾平」前に駐車して登山準備始めた。前日の天気予報では、今日はまずまずの天気と予報されていたが、すでに雨が降り始めていた。なぜだ？・・・と。後でわかったが、台風が四国の南海上で予想外に北上したため東よりの風系で雨域が「予想外に」に祖母山系まで届いてしまったとのことである。その変化を知る由もなく、今日を逃しては再挑戦は不可だろうと、覚悟を決めて天気回復の期待半分で往復8時間の長丁場の山行きに出発した。登山口で登山届をだして、少々登りがきつい岩峰と溪谷と原生林の黒金尾根コースを登りに、下りは緩やかで整備されている宮原コースを選んだ。

登り始めの登山路からはそそり立つ祖母山が紅葉の深い谷の向こうに見えるはずだったが、残念ながら山頂付近にガスがかかってしまっていた。川上溪谷の入り口には吊り橋がかかり、渡れば宮の原コース、くぐって谷筋を登ればつり橋を渡って黒金尾根の取りつきとなる。いよいよ急登となった。100mごとに標識が現れるのでそれを目標に足場が滑る急峻な登山道をひたすら雨の中を登り続けた。登山者が少ない静寂コースらしく雨で垂れ下がったクマ笹が登山道の両側から覆いかかり、それを濡れながらかき分けて登った。足場の悪さとともに難渋した。800m、900m、1000m・・・と数え、ついに1500m付近の天狗の岩屋という巨岩がせり出して雨を避けるところがあり一休みをしたが、予定よりかなり遅れ3時間近く経過していた。ここまでに会った登山者は頂上をあきらめて下山してきた10人ほどグループだけ。雨は小雨に変わりもう一息の登りでやっとに待望の稜線に出て、クマ笹の煩わしさから解放された。縦走路からの眺望は残念ながらガスの中で紅葉した木々が霧のなかで浮かんでいた。頂上までの稜線での登り下りは意外に多く、頂上直下の岩場の梯子、ロープを使っただけの最後の登りでやっと頂上に着いた。13時30分、標高1756mで標高差およそ1200mの登りに5時間近くかかってしまった計算になる。

360度の眺望があるはずだったが・・・残念である。秋の陽はつるべ落としのごとく夕暮れが早いのでと頂上を撮影し柿を一つ食べて13時40分に早々と下山を開始した。九合目の無人の山小屋を通過して馬の背と呼ばれる稜線をあまりアップダウンがなく快調に下り、宮原の分岐からいよいよ本格的な下山となった。宮原コースははじめ急な下りとなったが、黒金尾根コースに比べて登山道が広く歩きやすい整備された道が続いていた。15時過ぎとなると原生林の木々の中を下るのでほとんど人と会わずに夕闇が迫ってきた。休憩なしで先を急いで、夕暮れ迫る16時40分にやっと宿についた。出発してから8時間20分、疲れた、濡れた1日であった。よくぞ歩いたと自身を褒めよう。「ほしこが in 尾平」は立派な山荘風の建物で、以前は青少年旅行村の施設だったのをNPO法人に経営がかわり安く泊まれるホテルのようなものとなった。とはいえ研修目的なので教室のような大部屋で20人くらい泊まれる部屋しかなく、そこに豪華一人で泊まることになった。宿の管理人に聞くと、最近は青少年ではなく百名山のツアーの中高年客がほとんどとのことだった。私もその一人であった。レストランは天井が高く立派でアルコールは禁止されておらず、夕食のビールは格別で料理もことのほか美味であった。

★8日(26日)《尾平 - 豊後竹田 - 長者が原登山口 - 法華院温泉》 九重山(94) 1791m

尾平から戻り、登山口の長者が原を出発して三俣山を巻きながら坊ガ爾ツの湿原を通り大船林道歩二でると、高台に今日の宿、秘湯、「法華院温泉」が見え始め、12時50分頃に着いた。最小限の荷物を入れて残りを宿に預けて13時には久住山に向けて出発した。頂上付近のガスが取れないので最短コースであるスガモリコースで往復することにした。宿の横を通る登山道を沢沿いに登っていくと、やがて両側から山が迫る賽の河原のような平坦な砂地となり、スガモリ越えの分

岐で左に折れて真正面の久住山に向けて荒涼とした北千里をケルンの列を見ながらのゆるりの登りとなる。やがて久住分かれのコルをめがけて谷筋をつめていくと徐々に傾斜を増してくる。1640mのコルに出た途端、自由がきかないほどの強風に吹き晒された。ガスで視界があまりきかず、一面に岩がごろごろしていて道が定かでないところを黄色いペンキを探しながら頂上を探した。視界不良のなか岩が重なる平たい頂上部に三角点と「久住山 一、七八七m」と書かれたポールをやっと見つけた。15時を回っていた。頂上は風が強くガスの中で、岩陰で一休みをして柿を一つ食して急いで下山。風に流されながらガスの中で黄色のペンキをたよりに戻った久住別れのコルは相変わらず風が強く、コルから下るとすぐに風は弱まった。稜線を下るとガスが晴れ、強風と視界不良が頂上付近だけだったのが残念。一気に下山して法華院温泉山荘についたのが16時少しすぎ。早速、部屋に荷物をおいて温泉に飛び込んだ湯船の向こうには大船山の山々が展望でき、大きな湯船でゆっくりと長い時間をかけて湯につかった。法華院温泉のものは700年ほど前に修験道場として開基したのが明治とともに廃仏運動で衰退し火事で焼失してしまった跡地に再建されとのこと。山荘内には「山の湯 あまたの中の 法華院」という深田久弥が書かれた昭和34年の色紙など山関係の書が多数が飾られていた。なかなか雰囲気の良い山小屋兼風情のある温泉山荘であった。夕方、夜、翌朝と温泉を堪能した。

★9日目(27日)《法華院温泉 - やまなみハイウエ - 阿蘇 - 空港 - 別府港》

熊本空港でレンタカーを返し、空港から大分に高速バスで向かった。大分でJRに乗り換えて別府駅へ。駅前でから別府港フェリーターミナルに着いたのが21時少し前。23時50分発の深夜発の四国の伊予八幡浜に向かい宇和島運輸のフェリーまで3時間、広い待合室は私が一人であった。フェリーに乘客として乗った人数は私を入れて3組5人、20畳くらいの区画に一人であった。後部甲板から別府のネオンを見ながら九州と別れを告げ一路、豊(九州)予(四国)海峡を横切り四国へ、佐多岬をかわして八幡浜港に2時35分着。船中にて5時20分まで仮眠した。

★10日目(28日) 《八幡浜 - 松山 - 伊予西条 - 石鎚山 - 伊予西条》 石鎚山 (95)

JR八幡浜駅5時33分発、松山に7時16分着、乗換3分で岡山行き特急により伊予西条に8時19分着。予約していた駅前のビジネスホテルに荷物をおいて石鎚山に向かった。バスの便が悪く大枚をはたいてタクシーに乗って40分、9時ちょうどの石鎚成就ロープウェーに間に合い8分で標高1300mの山頂成就駅に着く。正面に瓶が森の山々を眺めながらのゴンドラの景色である。山頂から15分の登りで1450mの本殿や旅館が並ぶ参道をならぶ石鎚神社成就社につく。神殿左側の御堂には神器が飾っており、後ろ側が吹き抜けとなっており、ちょうど大きな額に自然の石鎚山を借景してはめ込んでいた。石鎚山がまさにご神体、御堂の本尊のごとく額に納まっていた。神社本殿で安全祈願に賽銭を投げ込み神門と書かれた山門を通るといよいよ本格的な登山となる。といっても山門からは八丁坂と呼ばれる緩やかな下りが1300m付近のコルまで続く。この30分ほど陽に輝く紅葉の小径のトンネルが延々と続く。下りの気軽さで先の登りを忘れてしばしシャッターの連続となる。何枚、デジカメで撮っただろうか？近くの登山者が「同行者が写真撮影で遅れに遅れている」とぼやきが聞こえほどであった。紅葉の木々を前景に木々越しに石鎚山と天狗岳のピラミダルの双耳峰が秋晴れを背景に素晴らしく、まさに至福の時間が過ぎていった。景色を堪能して夜明け峠と書かれた道標のコルに下り、少し休憩して10時45分出発とした。少々腰の痛みが増してきたのでユックリと登ることにした。ついには登りの階段が始まった。ジグザグと急登すると試しの鎖場があり休み茶屋があり、間もなく30mくらい一の鎖場となり巻き道を使わず鎖で登ってみた。その後も階段状の登山道が延々と続き、二の鎖場、三の鎖場(腰痛を理由

にパス)を巻くと頂上が目前に迫り汗をかきかき登りながらひょいと顔あげると頂上神社の石垣があった。12時30分、祠のある弥山神社の標高1972mの着いた快晴の山頂からの360度の眺めは絶景であった。

最高点是天狗岳の鋭鋒の先にあり稜線のナイフリッジを越した先の岩峰の頂上、1982mが四国の最高峰である。弥山頂上を見返しながら、四国の山々を眼下に眺めることができた。今回の山旅の最後なので名残り惜しさもひとしおだったので、しばらく時を過ごしてしまった。さてと、帰り始めたて頂上直下を十歩くらい下ったところで一瞬バランスを崩して1、2mほど滑り落ち踏ん張った瞬間、腰に激痛が走った。いままで経験したことのない痛みだった。しばらく動けずにいたが、とりあえず弥山頂上に戻らねばと必死に稜線に戻った。しびれる腰を頂上で休めたが収まらず、覚悟を決めて13時、ストックを頼りに腰をかばいながら一步一步と下り続けた。少しでもひねったり衝撃を与えただけで飛び上るほど痛みが走る。頂上からの木道の階段が続くので下りは殊のほか腰への衝撃が大きく1時間半の下りはまさに地獄だった。このまま痛めばへり依頼かなと弱気な思いが頭をかすめた。ほぼ下りが終わって夜明け峠についたときは正直いって心からホットした。八丁坂の登りは土の道で助かりロープウェイの最終までにはと、休みなしに必死に下がったかいがあつてどうにか16時40分の下りに間に合った。最終まで下りられなければロープウェイの上の成就社の宿に転がりこまなければならなかったのである。バス停発17時22分、伊予西条駅前に18時16分着。駅前の宿に転がり込んだ。疲労の蓄積がついに爆発したのだろうか？ともあれ、計画した山は全て登った、後は札幌に戻るのみである。痛み止めにアルコールを十分、頂いた。

★11日目(29日)《伊予西条 - 今治 - 神戸 - 西舞鶴港》

帰りは予定がずれても融通が利く高速バスとフェリーとした。伊予西条から今治にでて、神戸行き的高速バスに乗って神戸から東舞鶴に向かい、小樽行きのフェリー乗るコース。四国は新居浜から阿波池田、吉野川沿いに横断して淡路島から明石大橋を渡って瀬戸内海を越えて神戸に渡る。なかなかのコースである。神戸は三宮の駅前のターミナル発で北上して分水嶺を越えて日本海側の東舞鶴に着いた。

★12日目(30日)《西舞鶴港 - 日本海 - 小樽港 - 札幌》

0時30分発小樽行き新日本海フェリーの二等寝台をとった。車利用でない乗客は30人程度で1万トンクラスの大型フェリーは閑散として静かな船旅だった。後甲板のテラスで推理小説を読んだり、レストランで食事をしてゆっくりとした時間を過ごし退屈しなかった。21時少し前に着いた小樽は風が強く小雪が舞い、南国の初秋の季節から初冬の北国に一気に戻されながら札幌桑園の自宅に戻った。かくして12日間の山旅は終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

●2010年(65歳 札幌) (96)～(97)2山:紅葉の季節、札幌から新潟に向かい越後駒ヶ岳(96)と平ガ岳(97)を登った。

★「越後駒ヶ岳(2003m)、平ヶ岳(2141m)・・・・・・ 2010年9月23日～26日

東京や名古屋在住の際、全国の山々を登り歩きましたが、登りたい山がいくつか懸案として残った。そのひとつである越後駒ヶ岳を登った。南側は急峻な斜面、中の岳、八海山越後三山のひとつである越後(魚沼)駒ヶ岳は、豪雪地帯の越後の山で遅くまで残雪が残る山である。今回は新雪前の紅葉の季節における最も静かな季節を狙っての登山である。冷たい雨に濡れるだけは避け

たかった。

9月23日11時00分発新千歳—新潟空港、JRで長岡駅、レンタカーを借りて約3時間。途中スーパーで食糧・アルコールを購入して、駒ヶ岳の北側からの登山口である枝折峠(1065m)駐車場に18時に到着して車中泊。途中は尾瀬に行く国道から離れて車1台通れる峠道をクネクネと30分、30台くらい駐車可能で快適なトイレ、水もある枝折(しおり)峠の駐車場は、遠く夕焼けの越後の山並みを眺められる好適地。平日だったので駐車場は登山者の数台のみだった。

24日4時半の起床で夜明け前の5時10分出発。長い稜線をアップダウンを繰り返しながら往路6時間弱長丁場の尾根歩きをスタートした。天気はピークにガスがかかっている程度で前日までの大雨は納まった。25分で銀山平への分岐の1236mの明神峠を通過、アップダウンが続き単調な尾根歩き1298mの道行山を巻いて、予定より30分くらい早く07時30分に駒の湯コースとの分岐である小倉山(1378m)到着、休憩。距離にして半分、いよいよ本格的な登りではなか先にピラミダルな姿の駒ヶ岳のピークが木々の向こうに見えだした。長丁場の往復なので天候が崩れたらとの危ぐと一人登山の気安さでどんどん先を急いだ。稜線を歩きが続き百草ノ池、湿地帯の鞍部にでる。ここからが標高差560mの本格的な登りとなる。ハナ沢の源頭の岩稜やガレ場を越して最後のクサリ場を越すと意外にも09時30分駒ノ小屋に着いてしまった。冷たい水場が秋まで流れており疲れた身にとっては大変な美味だった。とても立派な避難小屋(夏は管理人が常駐する)からお花畑の斜面をたどると駒ヶ岳のピークが目前に迫って眺められしばし休憩。頂上だけ少しガスっていたが、10時15分標高2003m頂上着、予定より1時間頑張ったことになる。残念ながら頂上のみ冠をかけたようにガスっていた。暫く待つと、ようやくガスが晴れ、青空を背景に越後の山並みから尾瀬の向こう会津の山並み、ぐるり360度の景色が見え始めた。山裾まで見える絶景である。頂上まで合った登山者は数名だった。十分堪能して10時40分頂上発。

幸い天候にめぐまれたので早め下山を始めた。北に伸びる帰路の尾根が延々と続いているのが見え、気を取り直して足を進めた。小倉山への登り返し、数え切れないアップダウンを越えて緩やかにひたすら下山しつつ14時30分には、出発点の枝折峠に戻ることができた。整理して車で20分のところの奥只見湖近くの銀山平の宿に着いた。

★平ヶ岳

平ヶ岳は利根川の源流部であり越後との分水嶺にあたる山々で最高峰の山である。尾瀬湿原の北西側に位置しアプローチが長く、尾瀬口の側の登山口からは往復12時間余かかる山小屋もない奥深い山である。歳を考え無理をしない方針で奥只見の銀山平から中ノ岐林道を1時間半、予約した民宿のマイクロバスで遡行する林道終点からの登山とした。

只見川の源流部にある銀山平を夜明け前の真っ暗な中、04時10分に出発した。一般車の通行不可の林道は国道352号線から右に分岐、揺れに揺れるデコボコ道を沢沿いに遡行、予定通り05時30分、標高1230mの登山口着となった。夜が明けた05時45分出発、沢を渡渉して通称、五葉尾根と呼ばれている尾根にとりつき、一昨日の大雨の影響が残ったぬかるんだ急な登りをひたすら登る。途中、平ヶ岳の頂上は苗場山のように山頂台地上の南のはじにあり、北端の玉子石の奇岩(2076m)に07時45分に着いた。ここからは池塘が点在する天空の湿原が見渡せるはずだった。ところが強風とガスの中、気温5度で寒く遠く尾瀬まで見渡せる眺望が全くない。それでもということで、ガスと寒さの中、西風を遮るものがない湿原を、頂上を目指して南下、08時45分にはやっとたどりついた。写真1枚をとってすぐに同じ道を下山、昨日の駒ヶ岳とは大違いだった。1時間以上早く11時10分には登山口に戻ってしまった。下界は天気が回復していて頂上の有様と

は全く違った。銀山平に戻って山行きは終わった。駒ヶ岳、平ヶ岳は登り残し山々で、本州の山仲間と全国の山をコツコツと登っていた結果、この二山を加えていわゆる百名山山々を 97 までとなっていた。

●2011年(66(歳 札幌) 1山: 残る南アルプスの光岳と北アルプスの水晶岳(黒岳(98)を登る欲張った計画をしたが、光岳が2年続く林道崩壊が復旧せず断念、富山側から有峰、折立で登山口(0830)から太郎平から黒部川源流の薬師沢小屋泊)、雲の平経由水晶小屋に泊まる予定だったが、一日違いで小屋が冬期休業に入ってしまったので急遽、雲の平小屋泊で水晶岳から引き返し鷲羽岳、槍ヶ岳縦走、東尾根から上高地への下山とした。天上の樂園雲ノ平からは振り返ると薬師岳が、正面に水晶岳がどっしりと構えていた。9月27日0405出発、稜線にでると槍ヶ岳が右に見えてきた。裏銀座の山々が迫り0830に北アルプスでも最も深い山といわれた水晶岳(2986m)頂上へ何年越しの努力で踏むことができた。鷲羽岳に引き返し双六小屋1435着10時間を超える歩程だった。翌日に西鎌尾根から3度目の槍ヶ岳の頂上を踏み、最終日、鎖場や鉄バシゴが続く難しい東鎌尾根を縦走して長い下りのすべ距離20km、累積高度が2kmを超す8時間半かけて上高地でやっと着いた。よく歩いたと自らを褒めたい。

★・北アルプス 水晶岳—鷲羽岳—槍ヶ岳縦走・・・

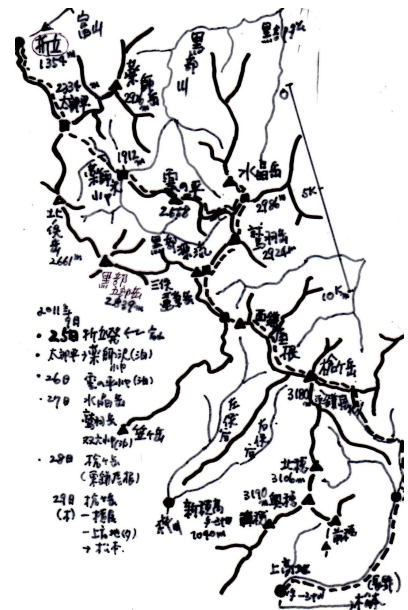
2011 年 9 月 25(日) - 29 日(金) 個人山行 村松 照男

北アルプス・水晶岳と南アルプス・光岳と欲張った計画を立てたが、光岳が台風の大雨によって長野県側から登山口に通じる唯一の林道が崩壊して断念。水晶岳から静かな裏銀座コースで烏帽子岳・ブナ尾根の下山予定も小屋が1日違いで冬季休業となってしまったので急遽、水晶岳登頂のあと、鷲羽岳、槍ヶ岳をへて上高地へ下山することとした。

9月24日、新千歳11:20発　ー富山空港12:55；
海際から富山平野に着陸態勢入った眼下、秋の実り、ほぼ稲刈りが終わった平野が広がっていた。空港は庄川の河口近くで富山駅までバスで30分。富山駅前のビジネスホテル泊（2900円、安い）。それなりの設備あり、夕食は駅前でおいしい富山ラーメン、オムスビとビールを買ってホテルに戻る。明日は早いので早々に寝る。

25 日 (日) 富山駅前 06:10 発の直通バスで 2 時間。途中、立山室道と分岐して有峰林道を S 字カーブでぐんぐん登る。有峰湖を眼下に薬師岳登山口の折立に着いた、このシーズン、金～日まで早朝のこの 1 便のみが有峰湖経由で折立に入るただ一つの手段。初冠雪も近い紅葉最後の週末で駐車場から溢れた車が路肩に多数並んでいた。

太郎平(2334m)に向けて08:10登山口発。以前、太郎平をベースに薬師岳、黒部五郎岳に登って以来の2度目の登りで、途中からは尾根に飛び出て何も遮るものなくほぼ一直線の登りを立山の山々の景色を堪能しながらゴロ石の道をひたすら登る。1時間歩いて5分の休憩のペースで登り太郎平に13:30、予定より早く着いた。ここから黒部川の源流に立つ唯一の薬師沢小屋に向かって急こう配の登山路を一気に300m下る。道は整備されているが急こう配で登りだったらこれは



大変だとの思いで足元を確かめながら、やっとわ沢筋に至る。沢に降りて、3回ほど本流を吊り橋で渡り、少し沢から離れこぶを越えて 16:30 小屋(1912m)着。小屋は薬師沢と黒部川本流を分ける二股に静かな佇まいで立っており、清流が足元を洗い水量の多い沢の音のみが響く幽玄境のテラスで少し涼し過ぎたがビールで乾杯。ここまで8時間。小屋は静かでゆっくりしたい気分。

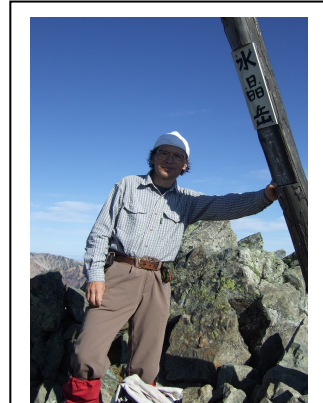
26日 予定どおりなら今日、一気に水晶岳を越えるはずだったが、黒部川源流が刻み込んだ深い谷筋で囲まれた標高 2558m の「天上の楽園」と呼ばれている高層湿原が点在する雲の平小屋に泊まることとした。薬師沢小屋の前の吊り橋で黒部川の源流を渡り、少し沢沿いに歩き、沢沿いに進むと高天原温泉へ行くルートと別れ、急こう配の沢もどきの道を登る。最後に岩場を人登りで乗り越えると急に開けた草原に出た。雲の平の広大なにて差後にひと登りすると一気に取りつき見渡せば薬師岳、黒部五郎岳そして、明日登る水晶岳の山々の稜線にぐるり囲まれ、アルプス庭園、ギリシャ庭園等と呼ばれた高層湿原でゆっくりとした時の流れを味わい、まさに雲上にある小屋で薬師岳に沈む夕日を見て暮れた。

27日 今日が最も厳しい日。03:30 起床、朝食後 04:05 小屋発。外は真っ暗。見上げた満天の星空に夜明け前の覇者オリオンが三つ星を抱いて鮮明に輝いていたが、足元は湿原にかかる木道が凍って足を取られ危険。祖父岳(2825m)までのヘッドランプを頼りの登りは起きがけできつい。ここまで標高差 400m。周囲の山並みの端に薄明が現れ、暗い紫色から次第に暁の明るさを増し 6 時少し前に御来光。少し時間がかかり過ぎた。若干の登り下りで鷲羽岳と水晶岳を結ぶ稜線のワレモ分岐(2841m)に 06:35 着。ここからはほぼ 2800m 付近の稜線歩き。天気よく快適。水晶小屋に 07:10 と意外に早く着いた。『御礼：26 日(昨日)から冬季休業。』と書かれて、1 日遅れを残念がる。気を取り直して小屋の前に荷物をおいて水晶岳ピストン。途中から岩場となる。08:30 頂上着。水晶岳(黒岳、標高 2986m)は北アルプスで最も山深い山のひとつである。深田久弥にして『大ていの山は頂上から俯瞰すると何か人氣臭いものを見出すが黒岳(水晶岳)からの眺めは全く絶っている。四囲全て山である』と言わしめているように、薬師岳から北へ立山黒部に伸びる山々、烏帽子岳に伸びる裏銀座そしてはるか後立山連峰が延々と続き、燕岳から常念岳へ表銀座、槍が岳から穂高の峰々の山また山が眺められた。再びこの山頂を踏むことはないだろうとの想いで離れがたく、苦しみ楽しく登った沢山の山々を見渡し見納めとした。初秋までの賑わいはなく水晶岳往復の 2 時間の間で逢った登山者は 10 人を越えなかった。

小屋に戻って稜線を南に引き返し、3 年前に登った鷲羽岳(2924m)を登り返した。あのときは 2 日程の雨降り続きで鷲羽から水晶岳ピストンだったが、雨の中の稜線歩きは危険と撤退を決意、鷲羽頂上まで引き返した。むろん、頂上では視界なし。きょうは 360 の展望、天気によって天と地の差である。黒部五郎岳への分岐の三俣小屋に下ってコーヒブレイク(値段も 500 円と高い)。そして新穂高温泉ターミナルと槍方向への分岐にある双六小屋(2600m)に向かって三俣蓮華と双六岳の稜線を巻く道をうんざりするくらい歩いて 14:55、ようやく双六小屋に到着。ここは水が豊富な小屋でテント場も広い(雨が降るとぬかるみとなりやすいとのこと)。今日は 10 時間 50 分の歩程、よく歩き疲労の極み。

夕食も美味しく、ビールもうまい。明日は、登り一方では時間は余裕。

28日 双六小屋 0605 発。西鎌尾根を経て槍の穂先(3180m)へ登り 3080m の槍の肩の小屋泊な



ので時間的には余裕あり。一気に樫沢岳(2755m)まで登れば千丈沢乗越まで楽な稜線歩きと想像していたが意外にアップダウンがきつい。天気がよく放射冷却で冷え込んだため高山植物が紅葉した地面に霜がつき朝日に微妙輝くに有様に魅せられ、あちこちで足がめて止まり写真を撮りで時間がどんどん過ぎてしまった。千丈沢乗越(2734m)から山頂まで尾根を標高差 400m の一気な登り。肩の小屋が見えてから傾斜が急となり、ガレ場にジグザクに切った登山路を息をつめて登る。小屋に 11:15 やっと着いた。少し休んで 12:00 小屋前発槍穂の頂上までは一方通行で左側の登山路を岩場、鎖場、最後は 30m ほどの垂直な鉄ハシゴで登る高度感・恐怖感あり。3180m (第 4 位) の山頂は槍の穂先の先で 360 度のグルリの眺望はまさに圧巻。三度目の山頂の天気は快晴微風、目の前に笠が岳、南アルプスから御嶽・中央アルプスそして遠く雨飾山から妙高も見え、南アルプス、富士山も眺められ至福のときとなった。下りは右側を下る。雲海の上の夕焼けもよかった。

29日 槍が岳から標高差 1700m、距離 20km 弱を下る。西岳に向う東鎌尾根の最低鞍部の水俣乗越からから槍沢に下ることとした。夜明けの御来光は 6 時少し前。黎明から燭光になるまで、1 時間間近く見た。雲海の向こうに常念岳の左側に太陽が登った。遠く富士山も見える。西側の雲海にはピラミッドをした槍が岳の影富士、影槍ヶ岳が投影されていた。まさに弧峰たる眺めを満喫。さすが 3000M の日の出前は気温が低くフードつきのカップがうれしい。06:35 小屋発。ヒュッテ槍から振り返る槍ヶ岳は見納めに十分余りあるほど立派で荘厳さを湛えていた。稜線は両側に切れているヤセ尾根が続く、三段の鉄の梯子も長く結構なスリリングなところが随所にあり手ごわく、振り返るたびに槍の穂先が小さく遠ざかった。水俣乗越 08:50。西岳の登りの壁を見て戻り急下降で槍沢ロッジまで下る。ここではほぼ本格的な下りは終了。ここから 14km 槍沢、梓川と続く川沿いの広い道を横尾小屋(穂高岳岐)、徳澤小屋、明神小屋と長い長い林道歩きの後、河童橋、上高地はすぐそこ。上高地 14:45。



東鎌尾根から槍を振り返る



8 時間 2 鳴 km を超える。これで水晶・槍縦走の 5 日間が終った。温泉に入りたく上高地の観光案内書に飛び込んだら、1 万円でもいい宿が見つかった。ゆっくり 5 日間の汗を流して露天風呂に使っていたら、急にまともな雨降りとなった。予想どおりとはいえ、まる 4 日の上天気は、最後の北アルプス山行きを自然のほうで恩恵を与えてもらったようだ。翌日の朝も雨だった。・・・・・・

ピラミット様の鋭鋒の山姿のニペソツ (2013m) はなかなかチャンスに恵まれなかったがやっとこの年の夏 7 月、やまびこ会山行の 7 人パーティ (2 人途中下山) で前夜に十六の沢で合の登山口近くでテント泊りで 4 時半出発登ることができた。

●**2012 年(67 歳、札幌)** : 本州最後の 1 山**光岳** (99) は何度も計画したが断念し続けた南アルプス最南端の山、予定とは全く違うコースで静岡県側大井川上流の畑薙ダム側からのぼった
山行記録・・・・・・

★『南アルプス 光岳 (てかりだけ : 2591m)、茶臼岳(2604m) (単独山行)

2012 年 9 月 3 日～6 日

南アルプス・光岳 (2591m) は日本列島で最も南に位置している最高峰の山でアクセスが悪く、長野県側からの遠山川沿いの林道がしばしば崩れて閉鎖となり 2 年を超える不通となっていた。4 年越し 3 度目の挑戦となった今回は静岡県側からの登山口、大井川の最奥に近い沼平ゲートからの登山とした。1 日目 (9 月 3 日) 9 時 20 分新千歳発、静岡富士山空港をへて JR 静岡駅近くで格安レンタカーを借りて 3 時間半、大井川の最奥に近い畑薙第 1 ダムの沼平ゲート前に 17 時半着 (泊)。途中の峠越えの県道が崩れて閉鎖されているため代替の 1300m の大日峠越えの狭いカーブが続く峠道が 1 時間半続き、ダンプをはじめ対向車との交差で難渋、冷や汗の連続で登山より大変だった。

2 日目 (4 日)、3 時 30 分起床。沼平ゲート前 4 時 20 分発。札幌より 1 時間くらい日の出が遅く、真っ暗な林道歩きで畑薙大吊り橋・茶臼岳登山口 (950m) につく。ダム湖面の上を渡る 550m の長さの大吊り橋が揺れる中、ヘッドランプを頼りに渡りきって登山開始。ヤレヤレ峠を越えて沢道沿いに何度か吊り橋を渡り 6 時 20 分、無人のウソッコ小屋前に着いて小休止。ここからが標高差 1250m の本格的な急登となる。覚悟を決めてハシゴからはじまるジグザク道の高度差 450m の登りを開始、標高 1600m の横窪沢小屋で一休み。ここからさらに標高差 850m の一気の登りとなり



水場を挟んでまさに急登、ジグザグ、急登の連続。登山道はよく整備されており 4 時間の奮闘でついに樺段に至り、予定よりも 1 時間早く 10 時 55 分、やく 7 時間で茶臼小屋 (2400m) についた。幸運にも直後、外は強風と対流性の雨に見舞われたが早めの行動で避けられた。30 人ほど泊り客がいたが小屋の炊事スペース利用は一人だけ。富士山を遠望、静かな山々を眺めながらコーヒ

ーブレイク、ワインで晚餐の後、早目の眠りについた。

3 日目 (5 日)、茶臼小屋、前日にレンズ雲の出現があり湿っぽい気流での午後のシャワーを避けるためと長丁場を考え 3 時起床、3 時 30 分の出発とした。満天の星にオリオンの大三角が輝き、半弦の月が山影を照らして私一人が 2600m の茶臼岳の頂上の岩場をヘッドランプで足元を照らしながら通過。これから 4 時間、静寂な山旅の稜線歩きが続く。希望峰の登りでやっと夜明けとなり、易老岳を過ぎてしめて十回を越えるアップダウンに悩まされながら先を急ぎ、2200m のコルから沢道をたどり、光小屋を過ぎると 8 時 48 分、光岳 (2591m) にたどり着いた。眺望はあまりよくなく、少し下った光小屋で聖岳を眺めながらコーヒブレイクと早めの昼食でしばしの休みをとった。帰路は登っては下りそしてまた登りをひたすら繰り返した。希望峰の下りでは茶臼岳から上河内岳・聖岳を望む稜線が緩やかに伸びて南アルプスらしさの素適な眺めが広がり今生の見納めとししばし足を止めた。小屋には予定より 1 時間早く 14 時 20 分山小屋に戻った。登頂ビールとワインで乾杯、夕食後、早起きで眠気に襲われ 18 時過ぎに早寝。

4 日目 (6 日) : 日程がタイトなので 3 時起床、3 時 35 分茶臼小屋から出発とした。5 時 : 横窪沢小屋、6 時 5 分ウソッコ小屋、大吊り橋登山口 7 時 50 分、沼平ゲート 8 時 30 分着。その足で温泉「白樺荘」に向かったが 10 時開館のところ無理にお願いして 9 時に入館、汗を流して難関の峠越えの道も無事に終えて車を返却、JR 静岡から品川乗換えで羽田空港へ 16 時頃到着。65 歳

以上、マイレージカード持参で当日・空席があれば乗れる『シニア空割』（12000 円）で新千歳・札幌へ戻り、本州の主な山の登り納めとなる光岳の 3 泊 4 日の山旅を天気にも恵まれた幸運の後押しを頂き終了した。沁から疲れたが気分は壮快、達成感あり。残る最後は北海道の一山。

この年、8 月札幌やまびこ山友会のメンバー 4 人でかねてから憧れていたペテガリ岳（1736m）西尾根ルートで登った。響きのよい名前についた山々、コイカク、カムエク、ポロシリそしてこのペテガリ岳（「ペッ・エ・カリ」、から地元ではペテガリと呼び山荘の名はペテガリ山荘）山行の 1 日目 0630 北広島発、浦河の手前の荻伏で左に折れて神威橋から元浦川林道を 13 km、結構長い。1020 神威山荘近くの駐車場着。ペテガリ山荘に向けて峠越え。最初の沢の徒渉をあやまり 1 時間ほどのロス。峠の沢沿いに進む、要所にテープがあり迷うことはない。沢の水量少なく、沢靴は必要なかった。峠近くは笹の中の急登、660m 付近の峠からの下りがきついが、やがて左小さな沢が明瞭となり畑を横切ると立派な林道にでる。ここから 3.8 km 長い林道歩きで 1515 ペテガリ山荘着。山荘は新しくトイレ炊事場は照明があり。外のテーブルで晩さん。ペテガリ山頂まで長丁場の歩きとなるので 0315 起床、5 時出発。最初の高度差 850m の急峻な登りでその後果てしなく続くアップダウン、8 回まで数えたすえ最後コブを必死で登る。頂上を前に大きく下り 1301m のコルで最後の覚悟の休み（10 時）。標高差 420m のハイマツ帯の最後の尾根を登りやっとペテガリでなく『ペテガリ岳』と書かれた頂上についた（1135）。6 時間半かかった。残念ながら薄いガスの向うにおぼろげな日高の山並を垣間見ただけだった。頂上で去りがたく昼食休憩を兼ねて 50 分ほど休み下山開始、往路のアップダウンを登り降りして疲れた足を引きずりながら同じだけ苦しみで足を進め最後の稜線の少ピークで振り返ると眺望が開け山頂方向が遠望できた。ペテガリ山荘には 1730 着。アップダウンを含めた累積の高度差は 1700m を越え 12 時間半かかったことになる。疲れた。忍耐の山を達成し夕餉と祝杯ご爆睡。しかしながら深夜 2 時過ぎ、突如突き上げると大きな揺れが小屋を襲った。短い時間だったがすぐラジオの情報で確認する震源が近くの日高中部で震度は 5 との情報。幸い小屋は頑丈で広く新しかったので大丈夫だった。神威山荘からの帰りの林道が山奥の一本道なのでの落石被害を心配したが少しの落石が散らばっていただけで安全に通過、途中温泉出汗を流して札幌に戻った。一つ懸案の山を登り終えた。

●**2013 年（68 歳、札幌）**：百名山最後の**斜里岳**（100）はやまびこ「道東の山々、羅臼岳・斜里岳」山行で登った。

★「道東の山々・羅臼岳・斜里岳」。やまびこ会報に報告。

2013 年 7 月 13 日～15 日 天気 3 日も快晴

メンバー （羅臼岳・斜里岳）L 村松 金重、吉川、羽生、三上（由）、松井、
上西、高澤 （斜里岳） 片寄、三上（淳）、干場、山下

自然が奥深い知床の羅臼岳と斜里岳の山々を 13 人のメンバーで爽やかな自然を満喫しながら、羅臼岳メンバー 9 人、斜里岳合流メンバー 4 人の 13 人で、まさに幸運そのもので天からの贈り物を頂いたような快晴で全員が頂上を踏むことができた。途中の山道もとても変化があり印象深い山旅となった。

7 月 13 日：羅臼・斜里組は 6 時野幌発～白滝経由で知床ウトロの国設知床野営場 16 時。途中、オホーツク海を望むサロマ湖、百花繚乱の小清水原生花園、知床五湖と素晴らしい天気と自然を満喫、明日登る羅臼岳を遠望し、オホーツクの海に沈む夕陽と夕焼け空を眺める絶好の丘

のキャンプ場の芝生の上で前祝の夕食と宴会。

【羅臼岳登山】14日（日）

5時45分：羅臼岳岩尾別コース登山口～9時15分羅臼平～10時40分羅臼岳頂上（全員）～15時15分登山口戻り。

4時起床、朝食、テント撤収と手際行くキャンプ場出発。岩尾別コースで標高1660mの羅臼岳登山、木の下小屋登山口の230mから標高差1430mの登り。5時30分のホテル地の果ての駐車場はすでに満杯でかなり戻って道路脇に駐車。木下小屋から登り始め木立の中をジグザグと登りオホーツク展望台通過でやっと眺望が開け、1年中水が涸れることのない弥三吉水の水場着、冷たい水を味わい休憩。しばしの急登で極楽平に入り緩やか勾配となりまさに天国、極楽で頂上まで4.0kmの標識を通過した。新緑のアーチのような岳樺のトンネルで枝に頭をぶつけながら通り抜け、仙人坂をトラバース気味に急登し、汗だくで銀冷水でもう一休み、水が冷たく涼しくなってきた。大沢入口から深い緑の中に一直線に続く大沢雪渓の登りとなった。今年は残雪が多く、まさに大雪渓となりかなりの急こう配で軽アイゼンを装着、結構な雪の斜面を登る。振り返ると雪渓が延々と真っ青なオホーツク海に向かっていて。雪渓が終わって少しゆるやかに登ると例年ならお花畑が出迎えてくれるが、今年は雪解けが遅く花が少ない。羅臼平では（写真）ピラミッドライクの羅臼岳が素晴らしい。あと400mの登り。ハイマツの裾野を登り、冷たい湧き水が滴り落ちる岩清水で一息、このあとの急な登りの岩場で登山者が賑わい登り下りが交差して大渋滞に巻き込まれた。10時40分羅臼岳山頂着。天気快晴でまさに360度の眺望、知床連山が眼下硫黄岳まで見渡せた。真っ青な空と緑の山々のコントラストが素晴らしい。はるか北方領土は下層雲に覆われ頭だけが雲の上に顔をだしていた。抜けるように澄んだ青空に向かって聳える山頂は桃源郷の世界を堪能させてくれた。羅臼岳頂上で記念撮影。沢山登山者で賑わう頂上を避けて直下でゆっくり休憩、名残惜しいが下山開始、羅臼平通過、大雪渓の下りは慎重に下る人、雪に親しみながら楽しく下るなど各自色々な下り方で先頭と最後尾で時間差がついた。一本道の下山だったが1400mを越える標高差は意外に長～い下りだった。遅い組が15時少し過ぎに登山口着。

知床岩尾別からウトロに戻り斜里へ1時間。途中、今晚の夕食・宴会のオホーツク産のホタテなどシーフードカレーの食材を地元スーパーで購入、17時斜里、温泉のお風呂付のクリオネキャンプ場着。斜里岳登山組の4人と合流、13人でロングキャビンなかで大変賑やかな夕餉のひと時となった。早起きと登山疲れでアルコールも残るほどの早めの就寝となった。

【斜里岳登山】7月15日 清里コース斜里登山口（清岳荘前）：5時40分発、下二股8時25分、上二股、9時45分斜里岳頂上、15時15分登山口、22時 札幌戻り

3時30分起床。朝食・キャンプ場出発、清岳荘前登山口からしばらく林道からゆるやかな登山道歩きから本流の沢に入り13回か14回の渡渉を繰り返して下二股分岐へ。この時期としては残雪多く雪解けの水で増水した川をメンバー13人が連らなつての渡渉に難渋した。下二股の分岐から旧道へ入り沢沿いに。かなりの急な沢登りとなった。白糸の滝、羽衣の滝、万丈の滝、龍神の滝と見ごたえのある滝が連続し、巻き道もあるが結構シビアで、沢を左岸右岸と渡りシブキをかぶりながらヘツリ、沢歩きのような爽快さと水の冷たさ、涼風がとても心よい沢登りを十分味わった。8時35分やっと上二股（新道・旧道分岐）到着、旧道も終わり緩やかな沢沿いの道となりおもったより長く歩いて稜線に顔が出て、快晴の陽差しが痛いほど強いよ頂上が見えてきた。まさに胸突き八丁の急なガレ場の登りの先の雪の残る馬の背を目指す。残雪の多いとの話を聞いて危惧していたが問題はなかった。馬ノ背から左に折れ曲がり斜里岳頂上に向かう。0945

斜里岳頂上 (1547m) を踏んだ 13 人全員で記念撮影 (写真)。増水した沢の渡渉や急登などでハードでしたが全員頂上に立てましたのはうれしい限り。日本 100 名山の 100 番目の登頂を皆さんでお祝いをして頂いた。干場さんの手作りでステッキに巻いてきた垂れ幕、100 の字のローソク、頂上ビールを少々頂くサプライズもあり感謝、感謝でした。下山は新道尾根コースをたどったが、熊見峠からの下山は足元が滑りやすく、気を抜くと滑って転ぶ急降下の厳しい道だったが全員登山口着。近くの温泉で汗を流し、遠い札幌に戻ったのは 22 時過ぎとなった。天気にも恵まれ、爽やかな楽しい山旅だった。



おかげさまで、斜里岳で日本百名山をなんとか達成することができました。東京中心の百名山なのでたまたま向うに勤務していた時に山仲間と多く登った山がいつしか百名山の 80 を越え 99 となっていました。その多くの山々は登山路がよく整備されており、北海道の山々のような神秘性、奥深さ、残雪や沢登りとは趣を異にしております。皆さんから登頂記念を一緒に登ってお祝いして頂きました。参加メンバーの方々に感謝します。ありがとうございました。

☆☆☆☆☆

九州の屋久島から北海道の利尻山まで日本百名山を俯瞰すると、関ヶ原以西では九州、四国、関西で 12 座 (山)、北海道で 9 山と極めて少なく、北アルプス、南アルプスから関東甲信の山々から東北地方南部周辺の山々と広がり首都圏から高速道路、新幹線、航空路等の交通網が首都圏から放射状に伸び、夜行日帰り、山中 1、2 泊で十分登れる東京中心に行きやすいピラミット様の形状の山々が選らばれている。たまたま東京とその周辺の勤務が長く、また単身赴任勤務もながく行きやすい環境の幸運に恵まれていた。本格的に登り始めてから 18 年を振り返ってみれば、本州の脊梁山脈である北アルプスから南アルプス、そして中央アルプスの山々と、結果的に日本最高峰の富士山を始め奥穂岳、北岳、間ノ岳、槍ヶ岳、悪沢岳、赤石岳、涸沢岳、北穂高岳 . . . と続く 3000m 以上の山々が南アルプスの聖岳まで 21 山あるが全て登り、劔岳 (2999m)、甲斐駒ヶ岳 . . . から鳳凰三山観音岳 (2840m) と続く上位 50 山のうち 42 山を登っていた。大雪渓から登る針ノ木岳は登るチャンスを逃し心残りだった。3 度登った槍ヶ岳は、北尾根を残し西尾根、東尾根、そして槍沢から、槍ヶ岳、に登り南岳、北穂高岳、奥穂岳、ジャンダルム、独標、西穂高岳に抜ける槍・穂高大縦走を果たした山行など多くの山々を仲間と苦楽を友にして楽しんだ。1964 年の四国剣山を一人で登ったことから始った百名山は途中 20 年以上の空白を挟んで 50 歳にして本格的に登り始めて 18 年、時には山仲間と時には一人で時間を見つけては登った山々が結果的に百名山全てを登りきることができたのは望外の喜びであった。多くの方々に感謝をしたい。

